月と太陽

幸恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月と太陽

【Ｎコード】
Ｎ１８３２Ｑ

【作者名】
幸恵

【あらすじ】
組織壊滅、解毒剤は完成した。躊躇う心と弾む心。
月と太陽のように、決して交わることのないふたり。
ＣＰ新蘭→新志予定です。新蘭の方はＢＡＣＫお勧めします。

Ｆｉｌｅ１（前書き）

新連載！…幸恵です。
以前も書いたような気が欝すら致しますが、今回も頑張りたいと思います。
スローな文章かと思いますが、どうか長い目で見てやってください。

File1

この手の中には、隣にいる彼を大きく左右する物が握られている。
地獄や天国。幸福や不幸。
それはそれは天と地の差があるこの両方を、一瞬にして引きずり回すことができるような。そんな、危ない代物。

必死の想いで作り終えたこの薬。気がついたら朝が来ていて。机から身体を起こして、自分の行為が急に現実味を帯びる。

久しぶりの春の心地好い日差しが、アスファルトに照り付けている。
数メートル先を歩く子供達が標準値。後ろを歩く私たちは、異様なオーラを発する小学生。
いつもの光景だ。

「コナンく〜ん！哀ちゃ〜ん！置いてっちゃうよ〜！」

歩美がくるりと振り返り、コナンと哀を手招きする。少し拗ねたような表情だった。
歩美が立ち止まるのにつられ、元太と光彦も振り返る。ぽかんと特に気にも留めぬように。光彦は多少哀に頬を赤らめたが。
コナンは哀を横目で見てから叫んだ。

「おめーら先行ってろよ！」

「えっ何で！？」
口を揃えたのは歩美と光彦だった。

「あ…いや、ちょっと俺ら寄るとこあるから……はは」

こんな言い訳は、余計引き下がれなくなるという、無効なもの。コナンは苦笑いを浮かべる。
しばらく妙な距離感を保ったままだったが、「行こうぜ？」元太の一声で二人は仕方なしに歩き出した。
三人が街角に消えていく。哀が呟くように言った。

「何で帰したの？あの子達のこと…」

「……いや、べつに」

曖昧にごまかす工藤君。私に気を遣ってのことだろう。
いつも、いつも。
その優しさが苦しいのに。

口を開こうとして、またつぐむ。

解毒剤なんてモノ、彼に渡さなくても済むのならどれくらい楽になるの。
したくなかった、けどせずにはいられない。解毒剤は完成した。
身体は拒否したとしても、頭が許すようなことはしない。組織が抹殺された今、原因を作った私は、最後の最後の仕事まですべて終らせなくてはならない。
過去を清算するためにも。
清算なんて出来はしないと、心のどこかは言っているけれど。

「灰原――？」

心地好い声が耳をつく。
体が妙に軽く受け入れる、この声だけは。

「何よ」

素っ気なく呟く様子に、可愛いげなど一切なくて。今更変えようとも思わない。私はひねくれ者だから。
視線を隣の彼に移すと、予想外に彼の顔が近かったもので、一瞬たじろぐ。

「…！」

「いや…、ボーッとしてるからさ」

いつものキョロキョロした瞳とは違う、全てを見通してしまいそうな、あの工藤新一の瞳。

「…べつに」

「ふぅーん…？」

納得仕切れぬように歯切れの悪いことば。
足し算や引き算の暗唱をしていく子供達。つまらなそうな工藤君の目が形を変える。

「…はいばら？」

「ねぇ、工藤君」

私はこれでも、彼から『相棒』って言われるくらいだから。彼の本音を見てきたのだから。
蘭さんを想う工藤君の気持ちは、痛いほど分かっている。
そして蘭さんの工藤君を待ち続ける恋心も。

「今日博士の家に来てほしいんだけど」

手中に在るカプセルをそっとケースに押し込んだ。

愛や恋は、移り行くもの。
この愛が、いくら永遠だと誓えても。この愛を感じることは許されないから。

久しぶりの呼び出しに、不思議そうに首を傾げる工藤君。私のこんな気持ちなんて、知らずに。今も私の傍にいるのだろう――

Ｆｉｌｅ１（後書き）

わぁ～ああ～……（エンドレス）
自信ないです。本当はもうちょっと後に出す予定だったのですが、
第一話となりました。
次回からは出来るだけハイテンポに、シリアスにならないように、
いけたらなぁと思います。あくまで思いますです。

次回もよろしくお願いします。

File2

「博士ん家？」

何だ、用って？

上を見上げれば、窓に毛利探偵事務所との文字。ぼーっと歩き続けて、いつのまにか着いていた。

何だ？用って。

灰原が呼び出すなんて珍しい。最近は全く無かったから。

隣を行く、灰原の目は灰色に濁り、相変わらず何を考えているのか読めないヤツだ。

心と身体に鍵をかけた女。

今だに怯えてるのか？

あの黒い組織に。

思えば数ヶ月前のことだった。ＦＢＩと協力し、見事打ち砕くことができた。この手で抱え上げたのは、あの追い続けていた銀髪の男。遂に捕まえられるかと思った。が、ジンは自分の心臓に銃口を向けた。耳を貫く銃声の後、ジンが血を流し倒れた。

『銀の銃弾……ベルモットが言うだけはあるな…』

俺らも傷を負うことになった。

目覚めた時は、生きてることが不思議だった。一ヶ月間病院を出ることは許されずにいた。

『死ななかったのね、私たち……ほんと…しぶといものね……』

生きていることに笑った灰原を見た時は安心した。

灰原は今もずっと組織から解放されていないのかもしれない。俺よりも数百倍も深い傷を負っているのだから。

アイツにも分かってほしいんだ。自分の居場所はちゃんと在るってことに。

まさか…灰原……解毒剤が完成したんじゃ…

「…は、んなわけねーか…」

都合よく考えた自分を現実に戻した。ちょうど階段を上りきっていた。ドアノブに手をかける。

もしも、解毒剤が完成したのなら。俺はようやく蘭の元へ戻れるんだよな…。思わず顔が綻ぶ。

「あっコナン君おかえり！」

蘭の階段を上る姿が見えた。

「えっあっら、蘭姉ちゃん！」

「どうしたの？そんなに汗かいて…」

「ううん…そんなことないよ。蘭姉ちゃん、今日は早いね」

やべーやべー…

蘭が頭を占拠していた時の、急な蘭の登場。冷や汗が止まらない。表情を繕い、話を変える。

「うん…部活が休みになっちゃって。そうだ！夕飯の買い出し一緒に行かない？」

「ああ、うん！」

蘭が先を行き、俺が見上げるようなその身長でドアノブを回す。そして俺が後に続く。

もうすっかり慣れ、当たり前のようになったこの行為。よくよく考えれば、何とも情けない話だ。

自分家の柵すら開けることができない。初めの頃は悔しく、情けなく。

やっぱ…元の身体がほしい…よなぁ……

蘭の背中をぼんやり見つめながら思う。

今夜7時…博士の家……か。

Ｆｉｌｅ２（後書き）

早くも次話投稿です。
……コミカルになりすぎましたでしょうか……。低レベルな文章力はお許しください。

お気に入り登録ありがとうございます！
次回もよろしくお願いします。

File3

夕飯のカレーライスをすっかり平らげ、俺はカーペットの上に身体を倒した。
7時か…もうすぐ出ねーとな。
普通のものとは一味違ったこの腕時計に目をやると、針は6時40分を指していた。小学生の時間はやけにスローに流れていく。
何かフワフワしてるんだ、最近は。気持ちが――上手くは表せねーけど。
組織を倒すという第一の信念は、もう断たれたわけだ。残るは解毒剤の完成のみとなった。……だからか？

後ろから足音がして、隣に蘭が座った。思わず俺は起き上がる。
「コナン君、カレー美味しかった？」
蘭はテーブルにふたつのカップを置きながら言った。中身はコーヒー牛乳らしかった。
「うん！」
「そう？やっぱり？今日は張り切ったのよ！…はい、これ」

蘭がカップを俺に差し出す。お礼を言って受け取ると、俺は少しずつ飲んだ。口内で広がる、甘くもほろ苦い味。
コーヒーがよかったな、なんて小さな望みも、小学一年の壁が許すはずもなく。
肩を落とすコナンに、蘭が首を傾げた。

「どうかした？」

「ううん、なんでも！」
慌てて首を振る。

「そう…」
彼女の顔には笑みが浮かび、
「よかった…」
そして影が落ちた。
悲しみを押し殺しているかのように眉を下げ、唇が微かに震えている。

「……らん…ねえちゃん…？」

恐る恐る口にしたのは、嫌な予感がしたからだ。
その詞が起爆材だったかのように、途端に蘭の瞳から涙が溢れ出た。

「ごめんねっ……へへ、コナン君の前で泣くなんて……弱いよね……」

甲で涙を拭い、無理に笑う蘭。
苦しさが胸を襲うくせに、大した言葉をかけることができない。

「…どうしたの…？らしくないよ」

テーブルがぽつぽつと丸く、涙で濡れている。

「……アイツからね…、連絡ないんだ」

アイツ＝俺

他の何者でもない。

蘭を泣かせてるのは、結局このろくでもない最低な奴だった。

近頃碌に電話もせずに、一体俺は何やってんだよ。

『そっか、元気だして』

第三者という皮を被って、そんな慰めの言葉は吐けなかった。

「……ごめん」

眼鏡に照明の光が反射した。俯いていた蘭が顔をあげた。

＊

「灰原ぁ」

どこか気の落ちた声がした。紛れも無い彼のものだった。入れた珈

琲め冷めてしまったのは、約束の時間より１０分押しているから。

「入って」

そう言うと、扉の向こうに立っていた少年の影が動き、扉が開いた。
顔を現にした工藤君は、声音同様、沈み込んだものだった。
家の中に入った工藤君は、上着を脱ぎながらソファーに腰をかけた。

「どうかしたの？」

「あ？」よほど周りに目が行き届いていないのか、漸く私に気づいた様だった。

「ああ……」
彼は息を吐いた。
「博士は？」

「今はお風呂。当分上がってこないわ」

「そうか」

中々核心を突こうとしない相手に苛立ちを覚える。

「…で、用件は何だよ？」

「その心理状況を説明してもらえない限り、とてもじゃないけど用件なんて言えないわ」

「……んー…」工藤君は頭をくしゃくしゃと掻き回した。そして暫くの沈黙を破り、呟くように言った。

「蘭がな…」

『蘭』

その単語が出てくるだけで、胸が手で掴まれるような、そんな感覚。こんな鬱陶しい感情を投げ売ることができたならいいのに。工藤君は私の心の揺れなど知らずに続けた。

「最近連絡取ってなかったから……泣かせちまった。ったく俺は何やってんだかな――アイツを二度と泣かせたりしねーって、決めたのは自分じゃねぇか」

追い詰めないでよ、自分を。

「……ごめんなさい」

「何でオメーが謝んだよ」

「結局は私のせいなの。私があなたをそんな姿にしたのがいけないのよ」

「…ったく何でオメーはいつも自分で自分を痛め付けるんだよ…。灰原は何も悪くねぇよ。こうなったのだって運命だ。だいたい、小学生にならなかったらアイツらとだって、灰原とだって逢えなかったんだぜ？俺、オメーに助けられてることといっぱいあんだからよ」

自虐的…？

私は最低な悪魔。私を痛め付ける人は誰もいない。だから、自分で罰を与えなければならないの。

その優しさは、私を苦しめる。その優しさは、私には価値が高すぎる。
軽く首を振り、意識を覚醒させた。
「じゃあ、今のあなたには嬉しい報告ね」
「報告…？」
「解毒剤が完成したのよ」
「は…完成？」彼は信じられないのか、聞いていなかったのか。
「ええ」
「ま、マジか！？」
「マジよ」
伝えたくない、という気持ちが、この言葉を抑制していたのに。案外すんなり行けたものだ。
「え、で？今日呑めんのか？」
工藤君は気分が向上している。予想通り。
「バカね。いろいろ段取りがあるでしょう。もう…小学生ではいられないんだから……転校ってことになるわね」
「……灰原…おまえはいいのか…？おまえも戻るのか？」

「……」

異様な空気が私たちを包む。

「自分の好きな方を選べよ…ゆっくりでいいからさ…」

Ｆｉｌｅ３（後書き）

哀ちゃんにコナンに蘭ちゃん。
三人とも辛い部分があって、一度に三人共が幸せになることなんてできない。難しいですよね。
昨日は杯戸シティホテルでのピスコとらの対決をＤＶＤで見ておりました。コ哀ニヤけまくりでした。

お気に入り登録や感想ありがとうございました！次回もよろしくお願いします。

File4

地下室へ向かう階段の途中。ここなら周りにも声が届かないだろうと踏んで。
リビングから離れているためか、ひんやりした空気が漂っていた。
階段を上ったところから漏れる明かりが、唯一の頼りだった。

数十分前、灰原が唐突に言った。『解毒剤が完成したの』と。それは唐突に、不敵な笑みを浮かべながら。蘭のことで語りだしていた俺に、これは嬉しい報告かもね、と。
あんなにも願っていたことが、ここまであっさりと告げられると、何だか夢のようだ。

どこか重い指を使い、携帯のボタンをプッシュしていく。ディスプレイには、毛利蘭の文字。
口の付近には蝶ネクタイを構えて。二度のコールの後、主は出た。

「しっ新一！？」

機械の向こうから聞こえる蘭の声は、焦っていた。一方俺は落ち着いて応えた。

「ああ…俺だよ」

ゆらゆらとうごめく、妙な気持ちを、蘭が型に嵌めてくれたような気がした。

「やっと…やっと…電話くれたね……」

「バーロ、泣いてんじゃねぇよ…」

「バカはどっちよ…！ずっと連絡もよこさないで…心配したんだから――コナン君とかも…最近いろいろあったから……もしかしたら新一もって…」

「わるい……あの坊主がどうかしたのか？」

強く振る舞っていても、強い彼女も、実はこんなにもか弱く。
カモフラージュのため、一応事情を聞いてはみるが、その坊主は俺なわけで。
嘘をつくことへの罪悪感には、慣れてきた。

「うん…何か大きな事件に巻き込まれてたみたいで……最近まで入院してたの…」

彼女の鼻をすする音が聞こえる。小さな姿でも、蘭に心配をかけることしかできない不甲斐なさ。しかし彼女は、機嫌は取り戻したようだ。

言うか言うまいか、頭をぐるぐると駆け回る疑問。
何故悩む？
そんな必要ないだろ。
嬉しいことだ、躊躇う理由などない。
息を吐き、何か言葉を待っているような蘭に向けて口を開いた。

「あのさ…蘭、もうすぐで今までの事件に片が付きそうなんだ」
「えっ…それって…帰れるってこと？」
「ああ、そういうこと」
「う、うそ…ほんとに？よかった！…で、いつ帰ってくるの？」
「それは、まだわからない。けど、もうすぐだから…だから……待っててくれよ」
「…待ってるよ？いつまでも。新一に会えるまで」

＊

ツーツーという機械音が聞こえるまで、携帯を耳に当てていた。
今日は何度泣いたんだろう。
自分が馬鹿みたいに思えて、思わず笑みがこぼれた。目から流れる水を、甲で必死に拭う。
「帰ってくるって……」
本当なんだ！
幾度も願って、そして叶わずにいて。信じられないような言葉に、体が中に浮いてる。
これからは毎日会えるんだ。

あの日を境に、日常生活から消えたもの。以前に戻れるのだ。
さっきまでとは違う嬉々の涙に、舞い上がる気持ちに、紅潮していく頬に。
蘭は身体をベッドに投げ売った。

＊

「終わったの、愛しの彼女との電話」

珈琲を啜りながら、彼女は某ファッション雑誌に目を通していた。
周りには謙遜されがちな彼女だが、これでもいい歳をした女なのだと改めて感じる。

「愛しって…そんなんじゃねーよ」

何だかムッとしながら、俺は目の前で湯気を立てている珈琲を口に運んだ。
気分を変えて、灰原をチラリと盗み見る。
普段の無愛想な灰原に見えるが、何か思い詰めて考え事をしているような気がする。

「な・に？」

灰原がジットリとした視線を向けてきた。

「あ…うん、いや、べつに？」

「おかしなひと」

いつものやり取り。素直じゃないベールを被るコイツの返答に、今さら苛立つわけなどない。

――何だかんだいって。

俺が一番コイツを、灰原哀を理解していると思う。これは、自惚れなのだろうか。

灰原が元に戻りたいと言うのなら、俺はそれでいいと思う。背負うものが重すぎた彼女だからこそ、今までの分、幸せになってもらいたい。彼女が選んだ道を、俺は俺なりにサポートしたい。

「心ここにあらずって顔ね」

「そうかぁ？」

「…今日は何で泊まっていくとか言い出したの？」

「まあ、いいだろ。たまには」

『灰原が気掛かりで、帰れそうにない』とは、言い出せそうになかった。

「いつも、何も、話してくれないのね」

目すら向けなかった。灰原の声からは感情など読み取れなかった。昔も言われた気がした。これに似たこと。

「そりゃ、オメーもだろ」

そしてこれに似たことを返した覚えがある。そうね、と興味もなさそうに灰原は雑誌のページをめくっていた。
そんな時だった。

「新一、来ておったのか」

熊の模様がかかっているパジャマを着た博士が入って来た。身体からポカポカと湯気が立ち、顔を上気させている。

「博士？ちょっとお風呂長いんじゃないのかしら」

「すまんのぉ…今の季節は体が冷えて、中々出られんくてなぁ」

苦笑いしながら弁明する博士。それを嗜める灰原。
本物の親子に見えた。

Ｆｉｌｅ４（後書き）

不思議な文章達です。謎です。

評価ありがとうございました！

次回もよろしくお願いします。

File5

朝の日光が遮光カーテンから僅かに漏れだしていた。そんな、天然の目覚まし時計に、恨めしいような視線を投げ掛ける。

博士とのベッドの間に置かれた小さな机の上にあるデジタル時計。７：００Ｓａｔｕｒｄａｙ。土曜日の朝７時。もう少し夢の中にいたかったが、仕方ない、目が覚めてしまったのだから。

諦めて身体を半分起こす。冷たい空気の漂う部屋。今日も一日動き出そう…として、一旦静止。

……？

なにかが違う。誰かに身体が当たっている。温もりが普段の二倍になっている。人の感触…？

「っ…」

ごくり、と息を呑んだ。隣に、超至近距離に、工藤君がいる。

スースーと気持ち良さそうに寝息を立てている彼。眼鏡を外しているからか、普段とは異なる彼を見る。江戸川コナンではなく、工藤新一に近い。何より無防備で、触れてみたくなる。こんな衝動を引き起こしている感情は一体なに？

変態へと変貌しつつある自分。それと同時に、頭の中のピースがカチカチと音を立てて組み合わさっていく。

昨日を…思い出した。

解毒剤ができた、と遂に彼に告白した。工藤君は驚き、喜び、すぐに私のことを考えた。『お前はどうする？』その純真な心で。私を思いやった。
ゆっくりでいいから、なんていらないから。
あなたは自身のことを考えて、優先して。いつも順序が違う。それが彼であり、私が惚れた理由でもあるのだろうけれど。
今はそんなの、虚しいだけ。

私にちらちらと目線を送る工藤君。知らないうちに彼は電話をして、彼は宿泊することになってた。

――ん？
じゃあ昨日は一緒に寝た？
工藤君と？

しゅうぅぅと煙が体から出ているような。体温が2、3度急上昇したような……体中が熱い。
『体は子供、頭脳は大人』とはよく言ったものだ。

舞い上がる気持ちは、段々と静まり始めてくれ、今は皮肉でも何でも言えそうな気がした。
冷静な目で、彼の顔をしっかりと認める。この少年には救われてばかりだったと改めて思い起こす。人一倍正義感があり、その正義で、なにもかもが上手くいくと思っている。
最後は正義が打ち勝つという、幼児向けのヒーローもののような信念を持つ、この少年。
いつの頃からか――姉の恨みも、ただの理想家という概念も消えて。
幾度となく私を救う彼を、愛してしまった。

あと数日後。

彼が私の傍から消えるのは。

「ねぇ――工藤君…」

私はどうするべきなのか。

無意識のうちに、彼の頬に触れていた。彼が起きてたら絶対できないわね、と自分に呆れる。

上下に動く肩。

顔の距離が近づいていく。

唇が…

「…んー…？」

彼の目が欠伸すら開いた。口から漏れる寝ぼけた声。心臓が素早く波打つ。急いで布団を被り、寝たふりをした。ごくり、と唾を飲み込む。

「なんだ…？……もう…朝か」

寝起きのためか掠れ声の工藤君。背を向けているから、表情は読み取れそうにない。穏やかなな寝息な裏腹に、胸の動悸が早い。バレてませんように、深く目を閉じた。

＊

変な夢を見た。
全く俺はド変態なのか。
アイツは絶対にありえない、と思い返してはみるものの、してしまったことは事実。ったく、頭は何を考えてるのだろう。
はぁと溜息をひとつ吐き、髪をくしゃくしゃとかく。
カーテンから欝すら漏れでる光。しかし隣に寝る灰原と、その隣で大いびきをかいている博士は起きそうにないので、俺も再び眠りにつくことにした。

すーすーという吐息が近くで聞こえる。…あ、昨日灰原と同じベッドで寝たんだ。
だからだ。灰原とキスするなんて、変な夢を見たのは。
そうだ、そうだと独りでに納得すると、自分の中でわりと割り切れるようになった。

俺の中での灰原――って一体なんだ？
相棒、同志、同級生、探偵団、秘密の共有者、運命共同体。
次々と浮かぶのは、どれも似たようなもので。男女や性別を越えた何かの感情を抱くことはない。
だからだ。こんなに焦ってるのは。夢の中では、俺と灰原は男女の境界線を越えてたから。
灰原が唇を重ねてて、それに驚きつつも、案外嫌ではない自分がいた。お互いがそんな関係になることはない、と大前提を置いているのに。
遠くでさみしげに、俺らを見つめる蘭の姿があり、罪悪感に苛まれながらも、灰原を求めている自分。

……まさか、な
あるわけねーだろ。

少しでも変な考えが過ぎったことに、俺は自分に苦笑する。頭をかぶり振ると、瞼を強引に閉じた。
再び深い眠りにつくことができた。

Ｆｉｌｅ５（後書き）

よくわからない話になりました。予定より大幅カットです。
次回もよろしくお願いします。

File6

「わたし、決めたの」

いつもと変わりのない日々の中、たったひとつの今日。「いちたすいちは、に！」少年少女の元気のよい声を横に、憂鬱そうに目を細めるコナン。
隣で哀は呟いた。誰に向かって唱えているのかも分からぬように。
コナンは反射的に、「ん？」と哀に視線をよこす。

「宮野志保でいること」

「あ…」

「解毒剤のむってこと」

「え…」

「驚かないのね」

「あ…いや…」

端切れの悪い、特に意味も持たない言葉を発するコナンに、哀は苛立った。別に、特別な何かを期待していたわけじゃないけど。
自身の中で、大きな決断であったから。たとえ、コナンには関係のないことでも。悩んで、悩んだ末に決めたことだから。

思うように言葉が出てこない自分に、コナンは首を傾げていた。喉の奥でつっかえたような。喜びなのか、戸惑いなのか、どんな感情を生み出していいのかわからない。ごまかすように、コナンは続けた。

「じゃあ…いつにするんだ？」

“いつ”の意味は知っていた。彼がきっと待ちきれなかった日。半ば故意に引き延ばしていた。平淡に、やや冷淡に言う。

「――来週の月曜日」

「あ…そっか」

わかったと言いたげに、コナンは首を振る。既に、彼の頭を洗脳していたのは、私じゃない。
その、来週の月曜日。
そして、毛利蘭、その女性。
高校生になったら、きっともっと離れてゆくのだろう。「ん、どした？」
「……嫌い」
哀は顔を逸らした。怪訝そうにコナンは聞く。
「誰が？」
「教えない」

未来に繋がるのかも、幸福になるのかも予測不能なままの決断。宙に浮いたような、ふわふわな気持ち。
揺らぎに揺らぐ心も。未来への不安も、全て抱え込んで。儚げに哀は笑った。

Ｆｉｌｅ６（後書き）

短い文面で驚かれたかと思います。本当は蘭ちゃんと哀ちゃんの対話入れる予定だったのですが、カットしました。次回になるかと、思います。

次回もよろしくお願いします。

File7

陰湿な空気が外を立ち込めていた。湿気が多く、向こう空に厚く灰色より黒に近い雲が流れている。図書室の端は、小学生が読まないような本が並べられた棚に囲まれ、賑やかな小学校の数少ない穏やかな場所。そこで哀は、窓際に頬杖をついていた。何を見つめるわけでもなく、微睡むわけでもなく。

独り隔離された時、漸く素顔をさらけ出せる。

儚い行く末に、ただ孤独を感じて。道標が欲しい。自分の決意は衝撃に脆い。情けない気持ちの捌け口はどこにもない。

進むのは苦手だ。

逃げるのは得意だ。

何もかも棄てる癖に、今更何に怯えるの。

本当に棄てきれるの？

「…なにしてんだよ」

心の奥に潜んでいた声。体が無意識のうちに壁をつくる。ポーカーフェイスを直すことにかける時間は、一体いくつ？

「あなたこそ何してるのよ」

隠せないのは鼓動の速さ。コナンを求めていることを主張していた。

「質問に質問で返すなよ。
お前ならここかなって思ってよ。人は来ねぇしな」
コナンは呆れ顔を持ちながら、隣に同じく頬杖をつき、空を仰いだ。
「降りそうだな…」

何をしにきたの、なんて聞かなくていい。この人の優しさは、痛いほど、十分触れたから。もう理解してる。
コナンが物静かに何かを見つめていたために、哀も窓の向こう、並べて止めてある自転車の中の、目立つ赤い色のひとつを、ぼんやり眺めていた。

「なあ…」コナンがふいに呟いた。何処をともなく泳いでいたコナン瞳は哀を捉えた。「迷ってんのか？」
元の姿に戻ることに――迷いを感じる。啖呵を切るだけ切って正直に言えるほど、単純じゃない。

「……貴方が羨ましいわ」
哀の言葉にコナンは首を傾げた。素直なコナンに、哀に思わず笑みが零れた。
「あなたに迷いなんてない。不安になる未来なんてない。帰る場所がある。地位もある」
きっと一生理解できない。何もない、味方もない、真っさらにならない限り、一生ない。
「多分そうだと思う。俺にはきっと理解できない」

「なにそれ、自惚れかしら？」軽く皮肉めいてみる。

「バーロ、違ぇよ。ただ、おめーは独りなんかじゃねぇってこと…忘れんなよ。もっと相談しろよ。もっと頼っていいんだぜ」

どうしてそんなに優しいの。

期待なんて、ほんの少しも抱いてないのに。コナンは哀の期待を軽々と超える。彼が私を見据える。澄んだ瞳と目が合えば、ねえ、求めてしまうから。これ以上を望んでしまう。失うのが怖い。どうしようもなく。

言葉が溢れ出る。

「好き」

口をついて出た言葉に、嘘など微塵もない。

性格の尖った女とか、性根が据わった女とか、きっとそんな類。この世に生を受けて、初めての告白も。表情に戸惑いや緊張は出さずに、胸の中で踊る鼓動だけは真実だった。

表情が強張るのがわかった。心臓が速く波打っている。誰に対してかは知らない。自分への言葉かと不意に思った俺は馬鹿だ。

硬直したコナンを見て、哀はただ、胸が押し潰された。

「…独り言よ」

「おまえなぁ」

総てを丸め込んだからかい。後の遣り取りも、すべてが心地好くて。
一時の戯れが哀の心を固めた。
壊したくないの、私なんかより、あなたを。

「工藤君、ありがと」

やっと目を見ることができそうだ。
不器用でごめんなさい。
そう、いつも導くのは彼。
灰原の似合わぬ御礼に、戸惑いが生まれたコナンは、ふい、と視線を反らし、頭をかいた。

「あ、ああ…？よかったな」

包まれていたい静寂は、鐘によって壊された。哀はコナンは置き去りに、図書室を後にしようと歩きだした時だった。

「灰原っ…！」

呼び止められたのは。
意味のない期待は置き去りにして、哀は振り向く。

「オメー最近蘭と会ったか？」

哀の額に汗の粒が浮かぶ。肌の色が蒼白になったことを、コナンは見逃さなかった。

「会ってたら、どうする？」

「何を話した？」

一週間前、街をふらふら放浪してた時。彼女、蘭に不意に呼び止められた。喫茶店で話した事柄。哀の頭に瞬く間に蘇る。そして、改めて決心する。

「いつか、わかるわ」

Ｆｉｌｅ７（後書き）

試行錯誤しましたが、うーん…な文章でした。次回もよろしくお願いします。

File8

――私の初恋は、幼稚？

そんなことない、と今も胸で深く思う。一般世間の見解は、幼なじみの初恋。甘くて、甘くて、甘すぎて、甘ったるいくらい。けど、私はそんな軽い恋だなんて思ったこと一度もないよ。

早く逢いたいよ、と。

雨の滴る空を見上げて、ただひたすらに想う。

新一が変わらないうちに、
早くはやく……

濡れたアスファルトを歩くのは、滑りそうで中々怖い。慎重に足を踏み出すこと、半ばそれを楽しんでいる。
赤い傘の柄を握る手は、だんだん冷えてきた。
園子は用事があるから、と告げて行ってしまったんだ。ぼんやりそんなことを思い出す。

「ちょっと、元太君～」

聞き覚えのある声にハッとする。傘を少しずりあげて、数メートル先を見れば、予想通りの光景。

あの子達がいた。

歩美ちゃんが笑顔で駆け出す。じゃれあう三人を見て微笑んだのもつかの間、顔が歪む。

胸が掴まれる、この感覚。
新一が戻るまで、消えることはないんだと思う。

三人の後ろを、冷静な動作で歩くふたり。

会話は怖くて聞けなかった。

長い間、ずっと一緒にいたような。信頼し合うふたりは、見てて悔しい。壊したくなるの。
並ぶ背中を見て、嫉妬してる。
こんな醜い私は、嫌いだ。

傘で視界を隠す。
雨が降っててよかった。

一刻もはやく、隣に温もりが欲しい。不安で仕方ないの。
考えるのは、またあなたのこと。

＊

浮かない顔をした彼がいたから、「どうしたの？」と聞いた。
彼は「寂しい」と呟いた。
戻るまで残るは三日。

「…らしくないわね」

こんな天気のせいでネガティブ思考にでもなってるのだろうか。

「この生活、俺だって嫌いなわけじゃねーよ」

「ふぅん」
軽く流してはみたが、
素直に嬉しかった。

「あとちょっとの間、ばっちり楽しもうぜ？」

あの子達のあと、彼とも別れの道が来た。
俯きがちに家路を歩く。
ピチャピチャという音が、踏み出す度に鳴る。

彼はわかってない。
蘭さんの気持ちを。

彼女は不思議な人だ。

両足をタイミングよく止める。
ちょうど家の前。

Ｆｉｌｅ８（後書き）

短めです。
方向性が不安になってきました。

File9

「今までありがとうっ…！」

瞳にたくさんの涙を溜めて、それでもそれを流しはせずに、歩美は言った。

昼下がりだった。今日で彼と彼女はいなくなる。

涙をこらえているのは、歩美の両脇に立つ元太と光彦も同様だった。

「向こうに行っても連絡よこせよ！」

「手紙書きますから！」

「私たちのこと…忘れないでね！」

次々に溢れ出す言葉に、ふたりの少年少女は「あぁ（ええ）」と頷く。

少年の瞳は、まるで我が子をあやすようだ。そう、彼は普段から親のような存在だった。

少女は、寂しさを押し殺して無理やりに微笑んでみせた。

お別れ会をした昨日、いつも一緒につるんでいた仲間達だけは、最後の日にさよならを告げに来た。

「三人で買ったんだ！」と黄色い花束をふたつくれた。花束の中に手紙が入っていた。

探偵事務所の前に集まる数人の知人――小五郎に、蘭、少年探偵団。後ろには黄色いビートルが、ライトを点滅させながら止まっている。

ロスへの留学が転校理由。
こんな醜い嘘、
嘘で塗り固められた転校を、
こんなにも悲しんでくれる。

わたしは、最低だ――哀は思う。そして、嬉しいという気持ちも隠せずにいた。
この花束も、その涙も、友達という輝かしい証のひとつ。

蘭は体を屈めてコナンを見た。

「コナン君、私にも電話してね？いつでもいいから」

眩しい笑顔に、いつもの要領で「うん」とコナンは返事をした。

哀がそんな蘭をじっと見つめる。それに気づいた蘭が哀に目をやる。

「哀ちゃんもよ！」

「……そうね」

「でもよー、どんなんかな？その…その…、ろ、ロースハムとか言うのは」

元太はあやふやな知識でコナンに聞いた。

「それを言うならロス、ロサンゼルスですよ、元太君！」

「もう、元太君ったら！」

「ははは……うーん、どんなとこだろうな。きっと新しいことばっかだぜ」

「…ねぇ、コナン君」

歩美が俯いたまま呼び止める。

「ん、なんだ？」

「私たち…五人……、離れてても友達…少年探偵団だよね？」

「……あったりめーだろ！」

力強く言い切るコナンに、三人の顔がぱっと明るくなった。

＊

どんどん景色が遠ざかってゆく。探偵事務所も、手を振る子供たちも。ガラスの向こう側の景色は移り変わってゆく。

後部座席に座るコナンと哀は、相変わらず黙ったままだった。

気になった博士は、運転席からミラー越しにふたりの様子を見た。

このあとは、博士の家に戻り、じっと過ごす手筈だ。外に出かけて、「さよなら」をした彼らに会わないように。

哀は無言で上着のポケットに片手をつっこんだ。そして取り出した物を見つめた。

「なんだそれ？」

「…ストラップ」

吉田さんがくれたのよ、
と哀は言った。
小学一年生の好みらしく、可愛い猫のマスコットがついたストラップだった。
哀の微笑んだ姿を見て、コナンはニッと笑った。

「よかったな！」

「みんな……痛いくらい優しいのよ…」

「ああ……そうだな」

わざと遠回りして自宅に戻るまで、長いドライブだった。
コナンの肩に、何かの体重が乗っかった。驚いて隣を見ると、哀が目を閉じて寝息を立てていた。

疲れていたのだろう――。

コナンは何も言わずに、窓の外、流れゆく景色を見据えた。

Ｆｉｌｅ９（後書き）

昨日に引き続き更新です。
文章の書き方…余白の空け方などが常に変化しています。
駄文ばかりですが、次回もよろしくお願いします。
近々また更新します。

File10

「…おはよ」

地下室から伸びる階段を上がってきた灰原は、既に起床し、着替えをしていた俺と博士に挨拶をした。

「ああ、起きたのか」

「おはよう、哀君」

欠伸をしない今日の欠伸娘を見て、珍しく思った。そして、さりげなく灰原を観察する。

昨日の転校、灰原には負担がかかりすぎた。帰ってからずっと、地下室に閉じこもったままだった。博士は心配していたが、そっとしておくことにした。しかし今朝の様子からして、どうやら元気になったみたいだ。ふぅ、と安堵の息を漏らす。

そんな間に、灰原は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、コップにあけ、一気に飲み干した。そして口を開いた。

「朝食は食べたの？」

「ああ、まぁ…軽くは」

「…そう。朝早くから悪いんだけど――」

「どした？」

「自分の家から服持ってきておいて」

ああ、そういうことか。

「ああ、わかった」

遂に、か。
返事はしておきながらも、上の空。頭は既にその後のことで洗脳されていた。
そりゃあもう。
どれだけこの時を待ち侘びたか計り知れない。なんだかんだ、あれから一年しか経ってねーのに。もう随分昔からの願いが叶うような、そんな気持ち。

朝の9時。俺は上の空のまま博士宅を出た。

よっ、と背伸びする。小学一年生の小さな体で、大きな柵を必死に押し開く。こんな造作もない作業を、命懸けでやらなければならない体。
もうすぐでおさらばだ。
漸く覚醒された気分で、俺は昔の、そしてこれからの俺の住まいと

なる家へと足を運び入れた。

＊

工藤君が出るのを確認して、地下室へと戻る。

窓などあるはずもない地下室。健康的な人にとって暗く陰鬱な場所かもしれないが、私にとっては生活の場。以前の私なら尚更。ここなら安心できるのだ。誰に弱みを見られるわけでもなく。

机上に置かれた透明なガラス瓶。カプセルが三つ。色違いのものが一つと二つずつ。

二個ある片方の赤と白ものは、私達の時間を十年ほど進めてしまう神秘的な秘薬。おそらく、私しか作れない。

これを完成させるだけに、どれだけの想いが交差しただろう。

たった一個のカプセルは、工藤君へのプレゼントだ。

瓶を掴む手が僅かに震えた。

こんな自分に嫌気がさす。

なんだか笑えてきた。ああ、これは。自嘲の笑み。

五人の子供達が黄色い車の周りに集まっている写真。写真立てにも入れず、机に乗っている。その中のひとりに目をやり、写真を裏返す。

ちょうど後ろで戸を叩く音がした。

「俺だけどっ…入っていーか？」

私は無言で扉を開ける。

息を切らした彼が、両手に工藤新一の衣服を抱えていた。興奮しきった顔で。

Ｆｉｌｅ１０（後書き）

すみません、相変わらず最悪な文章たちです。内容を理解していただけるかさえ不安になってきました。
次回は漸く解毒剤服用です。
次回もよろしくお願いします。

File11

「入って」

哀が澄んだ声で言う。コナンは興奮しきった顔を隠せないまま、室内へと入ってきた。

「そろそろ、か！」

拳を握りしめ、嬉しい表情を全面に押し出してくる。単純な人だと哀は思った。

コナンは拳を開くと、片手を哀へ差し出した。

「なに」

「解毒剤だよ、解毒剤！」

「…そんなもの、すぐにあげられるわけないでしょ」

哀は冷たく放つと、棚の上に並べられた体温計やら、試験管やら、注射器やらを手にとった。そして「座って」と言った。コナンは簡素な、病院の待合室にあるような長椅子に腰かけた。

「なにすんだ…？おまえ…」

コナンに不安の色が見えたことに気づいた哀は、クスリと笑った。

「安心して、殺しはしないから。ただ解毒剤を飲む前に、それに適した体か、服用した後のデータもとりたいから」

すぐに服用できるものかと息を弾ませていただけあって、多少落胆はしたが、我が儘は言ってられない。しゃーねぇか。これくらいは当然だ。

手渡された体温計を、コナンは衣服のボタンを一、二個外し、脇に突っ込んだ。

哀はパソコンを起動させ、素早くキーボードを打ちはじめた。

やがてピピピと機械音が鳴り、体温を計り終えると、哀が注射器を取り出し採血を始めた。

「痛い？」

「ちょっとな……あ、オメー馬鹿にしてんだろ」

「ちょっと黙っててくれない？」

…自分から話しかけたくせに。

コナンは哀をじっとり睨みつけた。そんなコナンの様子を見て、哀は楽しんだ。

哀の髪がコナンの顔に触れる。ふんわりと花の香りが漂った。コナンは妙な息苦しさを覚えた。

しばらく無言の時が過ぎた。
聞こえるのは、哀の叩くキーボード、部屋で動く加湿器の音。
この沈黙の時間がコナンを緊張させた。

「…大丈夫か？」

不安げに聞くコナン。

「……ええ。体温、血圧、血流いたって異常なし」

哀は瓶を取ると、くるりと向き直った。

「これであなたは元に戻れる」

コナンはごくり、と唾を飲み込む。
哀は椅子から立ち上がり、コナンに近づいた。

「これを飲んで」
哀はコナンの手の平に、色の違う二つのカプセルを落とした。
「解毒剤が…ふたつ？」
「気にしないで飲んで」
「あ？ああ…」
首を傾げながらも、コナンはカプセルをぎゅっと握った。
「あなたは一階の洗面所を使いなさい」
「サンキュ」
コナンは地下室の扉に手をかけて振り返った。
「灰原…おめーも戻るんだよな？」
少し間を置いて、哀は頷いた。「…ええ…そうよ」
「そうか。じゃあ、またな！」
コナンは笑顔で手を振り、部屋を後にした。

＊

リビングに出ると、博士がいないことに気づいた。
不思議に思いながらも、俺はいそいそと洗面所に向かう。
しっかりとカプセルは手中に収めて。
洗面所の棚の上に工藤新一の服を置く。鏡に映るのは、自分の頭くらいで。この身長を再び実感させられる。
小学一年生の幼き顔。
お別れ、だ。
この姿になった現実が、急に不思議で仕方なくなり、思わずフッと笑う。
約一年間に渡る長くも短い日々。今となっては全てが懐かしい。
すべての出来事を――今では後悔をしようともしない。それほど充実してた。
江戸川コナンになれて、よかったと思う。
「ありがとな――」
もう一度、見るのは最後になるであろう、江戸川コナンの姿をしっかりと見据えた。

そしてカプセルを勢いよく口の中に含んだ。

体が尋常ではないほど熱くなり、
骨が溶ける感覚、
心臓がせわしなく波打つあの感覚。

それを予想していたのに…
痛みは感じられない。

ただ、気がついたら工藤新一になっていた。

Ｆｉｌｅ１１（後書き）

春休みなので、暇なので、次々更新です。サブタイトルって難しいですね…。
関係はないのですが、昨日のドラえもんは泣けました。笑
次回もよろしくお願いします。

File12

「っハァ…ハァ」

脂汗が額から流れ出て頬を伝う。

どうしようもなく息苦しい。

ダメ。

心臓が破裂しそう。

体にマグマが流れてるみたい。

筋肉が膨張してる感覚。

私の作った薬のせいじゃない。

こんな痛みを伴う薬を作ったのも、全部、私じゃない。

工藤君は戻っただろう。

傷つくことなく、戻った。

彼に言えば、「要らない」って答えるに決まってるから。

「痛み止め」なんて、

要らないって。
薬の開発者はこの私なのだから、それを作ることは容易にできた。

だめだ。
もう何も喋れないほど。
絶頂がきてる
「アアァァァッ！」

＊

嫌な予感がした。
何故苦しみがない？
誰よりも俺が知ってる辛さ。
おかしい。
普段ならどっぷりとかく汗も、体にはなく。サラサラの衣服を、気負いもなくして着はじめる。
不思議を頭に付き纏わせながら、ワイシャツの袖に腕を通す。

鏡に映るのは、懐かしく思う工藤新一で。

まるで一瞬の魔法だったように、一気に体が戻った。何の苦なしに。

…なぜ？

そう、ワイシャツのボタン、最後の一個を止めようとした時だった。

瓶の中の三粒のカプセル。ひとつだけ色が違った。俺は色が違うものを、ひとつ余計に飲んだ。

そうか、わかった。

…あの薬だ。

痛み止めだったんだ。

そうするとおかしい。

あの痛み止めはひとつしかなかったじゃないか。

…灰原は？

気がついたら走り出していた。

乱暴に洗面所のドアを開け、一気に階段を駆け降りる。

防音が効いている部屋なため、中の音は拾えなかった。

が、灰原の様子が気になり、俺は押し入る。
開けた途端に耳をついた灰原の叫び声。
「灰原ッ！」
＊
体力も精神も底をつき、意識が朦朧としてる。
ちょっと高くなった目線に、戻ったという事実を感じた。
そう、どこかで私の名を呼ぶ声を聞こえる。工藤君の声。
膝が体重を支え切れなくなったように、がくりと崩れ落ちる。
誰かが倒れ込んだ私の身体を起こしていることがわかった。
肌に触れた手が温かかった。
「…おい、灰原！！」

Ｆｉｌｅ１２（後書き）

短くてすみません。切ったほうがキリがよかったので。
なんだか…よくわからなくなってきました。急接近しすぎなような。
次回もよろしくお願いします。

File13

何度も力強く呼ばれる声に、安心感を抱いて。呼ぶ彼は、私の傍でずっと顔を覗き込んでる。
“ずっと傍にいる”
これは、夢？

「…ばら」

夢でもいいから醒めないで、なんて考えは甘い、淡い。現実がやって来る。ほら、醒めるさめる。

「…ばら！灰原！！」

「工藤くん…」

意識は望みとは正反対に、はっきりと鮮明になっていって。
哀、否志保が呼びかけに反応し、目を開くと、新一は安堵の息を漏らす。

「…はぁ…心配かけんなよ…」

「…ごめんなさい」

「ほら、これ飲め」

新一は冷水の入ったコップを渡した。志保はぶっきらぼうに受け取ると、それを拭い去るように勢いよく飲み干した。

「…ありがと」

「今まで何回もアレ飲んだからな。お前の欲求くらいわかるさ」

新一はハハッと笑った。

水が冷やした冷静になった頭で、辺りを見回す志保。見慣れた景色博士の家のリビングだった。

ソファの横で自分の介抱をした“工藤君”は、工藤新一であり、志保は半ば他人と顔を合わせてるような気分。

「無事に戻ったのね…」

完成品ではあったが、不安がなかったわけじゃない。志保はケロッとした新一の顔を見て胸を撫で下ろした。

「そうだ、オメーに聞きてーことがあるんだ」

「なに？」

「……灰原、おまえ俺に何を渡した？」

志保は目を逸らした。

「…言えよ」

「言ったらあなた、ごちゃごちゃ言うでしょ」

「ああ、内容による」

「じゃあ話変えてもいい？」

「おい！」

本題に入らない、話題を変えようとする志保に、新一は苛立ってきた。そんな新一を見て、志保はソファから立ち上がった。

「痛み止めをあげたの。辛くなかったでしょ？」

「で、オメーは飲まなかったんだろ？」

「ええ」

志保は事もなげに平然と言ってのけた。新一は怒りが入り混じった声を搾り出しただけだった。

「なんでだよ……」

「え…」

「なんでオメーはいつもそうなんだよ！」

「あなた何怒ってるの…」

志保の目が見開く。
珍しい新一の怒号。
普段は平凡な言葉に、呆れた顔しか晒さないくせに。

理性を壊してく。
何も知らないくせに。

私の気持ちなんて、何も知らないのに。
あなたが並べるのはいつも綺麗事。教科書を丸暗記したような、綺麗事。

「自分ばっか傷つこうとすんなよ…」

悲しげな寂しげな声も、志保の耳には通らなかった。

「あなたに……あなたに何がわかるの！？」

男物のワイシャツをひらつかせ、志保は地下室へと走った。

Ｆｉｌｅ１３（後書き）

立て続けに更新です。
展開早いかな？
次回もよろしくお願いします。

File14

あれから灰原は出てこなかった。追って地下室の前までは来てみたものの、かける言葉が見つからない。
諦めて引き返し、洗面所に置いてある服を最後まで着た。
頭を冷やすために顔を洗ってはみたが、すっきりしない気持ちがモヤモヤ残るだけで。効果はなかったらしい。
洗面所を出ると、博士が不安げな顔つきで帰ってきたところだった。

「どこ行ってたんだ？」

「おお、新一！戻ったのか！大丈夫じゃったか？」

顔をパッと輝かせる博士は、俺の質問には答えてない。そこには触れないことにした。

「ああ、なんか久しぶりだな」

「ほんとじゃなぁ……ところで哀君は？」

「アイツなら地下室だよ」
なんだか複雑な思いで答えた。

「無事かのぉ」

「まぁ、一応は……でも今ちょっと閉じこもっちまっててて」

俺はちらりと向こうに目をやる。

「ふぅむ…。実は哀君から頼まれて、外に出てたんじゃ」

「なんでだよ？」

「そりゃあ決まっておるじゃろ。自分の苦しむ姿を見せたくないからじゃよ…」

「……」

何もわかってない。

改めて情けない気持ちに追いやられる。それを察知した博士が言う。

「とりあえず君は帰ったほうがいい……蘭君も待ってるじゃろうし」

「そうだな」と俺は頷くと、大きくなった身体で博士宅を出た。朝は気にも留めなかったが、空だけは快晴だった。

これからなにしようか？

やりたいことが溢れ返ってるはずなのに、彼の頭を支配してるのは志保のあの叫び声だった。

蘭と会うのは明日にしよう、そう思った。今会ってもロクな話ができそうにない。

「新一っ！！」

「へ？」

＊

名を呼ばれた新一はドキリとした。新一が声の方向に振り向く前に、黒髪を靡かせた蘭が彼に抱き着いた。

「ら、蘭！？」

今日は会わない
考えたそばから。

「新一おかえり…！」

感動の再会？少なくとも彼女は。蘭は無言で新一へと回す腕の力を強めた。
彼女の表情が読み取れないまま、新一は恐る恐る彼女の背中に手を回す。

「ああ、ただいま」

「ほんとによかった…
ほんとに、ほんとに……」

「…ごめんな、今まで」

蘭はホッとした。よかった、変わってない。思い違いじゃない――よね？新一の胸におでこを当てた蘭は、今にも流れそうな涙を瞳に溜めたまま、新一から引き離れた。

「何してたの？なんて今日は聞かない。明日から学校来れるんだよね？」

「学校、行くよ」

「よかった！そのかわり、明日はみっちり聞かせてもらうから！覚悟してなさいよ？」

「ははっ、そうだな」

同じ目線、工藤新一として蘭と話すことに、新一は懐かしさを感じた。コナンとしては飽きるほど傍にいたのに。

「へへ」と明るく笑う蘭は、やっぱ灰原とは違う。ああ、そうだ。灰原はどうしただろう。アイツ…ついカッとしてしまった。自虐的な彼女、もう彼女自身を傷つけてほしくない。それが為だけにのことだ。

「……新一」

「あ…なんだ？」

「どうしたの、ぼーっとしちゃって」

「…ん、べつになんでもねーよ…」

「…そう。じゃあ明日ね！」

笑顔で手を振ると、走り去る蘭。その背中が見えなくなると新一は息を吐いた。

初めてだ――今日は蘭といるより、独りがいい。

Ｆｉｌｅ１４（後書き）

整理するために前話読み返してみましたが、４～７らへんは作者自身なんじゃこりゃって感じです。
読者の皆様、本当に感謝しております。

File15

「〜♪」

思わず陽気な鼻歌が流れる。私はカラリと晴れ渡った春の空を、見上げ満面の笑みを浮かべた。
向かうは、もうしばらく行くことはなかった、工藤新一の家。朝、こんなふうに彼の家へ行くのは何ヶ月ぶりだろう。

昨日は妙な胸騒ぎがしたから、新一の家へ行こうとしたんだ。そうしたら、阿笠博士の家から出て来る新一の姿があった。夢かと思った現実がそこにはあって。
戻ったんだね――コナン君。
気がついたら新一を抱きしめていた。新一の驚いた表情。抱きしめ返す手。不安と期待を行ったり来たり。
陥る、落ちる。それでもそんな暗鬱な考えは脱ぎ捨てた。私は信じてるから。そう、大丈夫。

新一の大きな豪邸が視界に入ると、私はまた笑みを零し、走り出した。
……あ、
無意識に足の動きが緩む。瞳がある人物を捉えた。博士の家に、珍しい、美しい髪の色をした若い女性が、何やら袋を抱えて入っていくのを。
あの髪も、あの顔も……そうか、彼女も――――。

彼女は阿笠邸に消えていった。その背中がどこか寂しげで、心の奥に何かがつっかえるの――同情。同情なんて…馬鹿みたい。頭をぶんぶんと振り、“バカ”な考えを振り払う。そして再び走り出す。

門前までくると、柵を開け、入口のインターホンを連打した。
ピンポ、ピンポ、ピンポーンッ！！
夢ではありませんように。
文化祭後のあの日がふっと頭を過ぎる。数十秒後、けたたましい音に顔をしかめた新一が勢いよくドアを開けた。
「ったく！一回鳴らせばわかるってーの！」
眠そうな、やや呆れた顔にホッとしたのは、きっと私くらいだ。

＊

うるさいインターホンが、今だ寝ている頭にズキズキと響く。
俺はワイシャツのボタンを留める速度を早めた。洗面所の水で顔をわしゃわしゃ洗い、キッチンに向かうと時間短縮のため食パン一枚を口にくわえた。
それまで面倒で放っておいたのだが、今だに鳴り響くこの音に段々と苛立ちが増してきた。
ピンポ、ピンポンッ！！
「あーッ！ったく！」
仕方なしに、欠伸を交えながら玄関の戸口を押し開いた。
「一回押せばわかるってーの！！」
いきなり飛び出したせいか、蘭は驚いて一歩引いた。
「ごめんごめん。また夢じゃないかって…つい」
蘭のこの表情（かお）にはめっぽう弱い。

「ふわぁ……すぐ準備すっから待ってろよ」
「はーい」
彼女は行儀よく返事した。ふぅ…俺はそれから頭をかきながら家の奥へと入った。
3分ほど蘭を待たせて、俺は外に出た。我ながら欠伸を連発していると、隣を歩く蘭に「昨日何時に寝たの？」と嗜められた。
塀では囲まれているものの、隣の豪邸の高さは中々なもので、ひょっこり頭が覗いてしまう。阿笠博士のやや奇妙な家を見て、ふと、灰原哀が大きくなった姿の、宮野志保が頭を過ぎった。同じく再び過ぎる、彼女のことば。彼女はこれからどうするだろうか。スタートラインに立った今。

「……そういえば、さっき博士の家に女の人が入っていくのを見たよ」
蘭が何気なく言った。
「あ……」宮野だ。「そいつの様子どうだった？」
「…あの人？そんな注意深く見てないけど…。綺麗な人だったなぁ。……新一知ってるの？」
急な質問に焦る自分、焦りは禁物。この教訓はコナン時代に叩き込まれた。
「さ…最近引っ越して来たんだよ。なんでも博士の友人の娘だとか言ってた…ような…」
泳ぐ目を自覚した。
蘭は消え入るような声で言った。「……そう」
「ん…どうした？」
わざと目線を外す蘭を見て、俺はただ首を傾げるだけだった。

File16

「あ！」

夕暮れも通り越していた。空では星が瞬いていた。明日もどうやら晴れらしい。

工藤新一に戻り、一週間が経った。

今日依頼された事件は、この体で久しぶりに解決した事件――殺人だった。妻が逆上した夫から身を守るために、夫を刃物で刺し殺した。それを隠蔽し、他人に罪を被せようとした妻。隠蔽に利用したトリックを、呼ばれた俺が解いた。彼女は警察に連行された。

今でこそ数え切れないほどの事件を解決してきた。殺人も大半を占めている。殺人なんて、言うのは簡単だが、どれだけのことをしているのか――それは計り知れないことだ。人の命を絶つ、人の人生を終わりにしてしまう、二度と帰ることのできない場所へと葬る。恐ろしい過ちをした後、犯罪者はどんな心境に陥るのだろうか。悩まされる罪悪感も、背負うことになる重い十字架も――。どれほどのものを味わうのか。

遊び半分で推理していた頃には、気づくことはなかった。好奇心を掻き立てるものだけでしかなかった頃には、考えたこともなかった。考えようともしなかった。

夫人の泣き叫ぶ声。取り付かれたように何度も。「こんなこと、するつもりじゃなかった！」頭でリピートされる。経験してきた事件、犯人の言葉は、狂いもなく、脳裏に焼き付いている。

「あなたに私の気持ちなんてわからない！」――そうだ。宮野にも言われた。彼女はどんな物を背負ってる？

明かりがポツポツと光っている住宅街。
生まれた頃から当たり前だったが、多分俺は世に言う“金持ち”らしい。周りからは飛び抜けたでっかい家が見えてきた。
その時だった。

「あ！」

…宮野だ！

電灯に僅かに照らされただけだったが、向こう側から歩いてくる人物は、宮野志保に間違いなかった。

…あれから、会ってない。

喧嘩して、あれから…会ってない。
喧嘩の原因？
自分だけ苦しもうとする宮野に、理性が切れた俺が…原因？

「宮野っ！」

そう叫んで走った。
相手が止まってくれるだろう、なんて考えを起こして。
確実にアイツは俺に気づいた。が、気づかないフリして、博士ん家に入ろうとした。

「オイ、待てって！」
ギリギリのところで宮野の腕を掴む。
しばらく黙っていたが、息を吐き、覚悟を決めたように俺に向き直った。
「…なに？」
怪訝そうな、迷惑そうなしかめっ面だった。
「あっ…いや…。まだ怒ってんのかなって」
「怒ってるって何を？」
「ほら、だから…お前が…その…」
「ああ、解毒剤のこと」宮野はいたって冷静だった。いや、そう見えた。
「怒鳴ったことについては謝るわ。ごめんなさい。…私も正常じゃなかったの。でも、」
「…でも？」
「痛み止めを飲まなかったことについて、謝るつもりはないから」
「わかったよ。話したくなったら……聞くからさ」
「それだけなら、腕離してくれる？」

「あ、わりい」

聞きたいことは、他にも山ほどあった気がしたが、今は言葉が出てこなかった。

手を離すと、宮野の腕はするっと逃げた。宮野はさっさと家に入ろうとしたが、思い直したように振り返った。

「…それと、私が寝込んだあと、着替えさせたのってあなた？」

「！！」

「素っ裸で解毒剤飲んだはずだったのに、目覚めたらワイシャツ着てたわよ」

宮野は、あのいつものからかうような顔で俺を見る。

どっと汗が吹き出した。

「しゃーねーだろ！？あのまま看病できるほど、俺は人間が据わってねーっつの！」

仕方なく自分ん家から自分のワイシャツをとって彼女に着させた。

…目のやり場に困った。

「…H」

「ああッ！だから！」

俺が焦っていけばいくほど、彼女は楽しそうだった。

「ふふっ」

そして宮野は笑みを零した。

…あ。

普段、コイツの笑顔なんて見たことねぇな。改めて思い返す。

俺がじっと見つめていたのに気づいたのか、宮野の顔はいつしか元に戻っていた。

「あのさ…」

「じゃあね」

言いかけて遮る彼女。どこか寂しげなアイツの背中が、見えた。

Ｆｉｌｅ１６（後書き）

なんじゃこりゃ……苦

私はまだまだ幼稚な考えなのか、シリアスは下手です。

File17

「ゴォォールッ！」
嬉しげで楽しげな新一の声が、帝丹のグラウンドに響く。たった今ゴールを決めた新一に、降参といった表情で、息を切らした数人の男子が近づいてきた。
「ハァハァ…さすがだよ…工藤…」
「参った参った」
「おまえ、どうやったら一人でこんな人数のディフェンス破れんの？」
「工藤～なんでおまえはサッカー部引退しちまったんだよ」
あっという間に新一を囲む人々。それに笑顔で、たまに苦笑いを浮かべながら対応している。

そんな久々のサッカーを楽しむ新一を、蘭は遠くで頬を緩ませながら眺めていた。
――何にも変わらない。
あのカオが、私は好きだ。無邪気な子供みたいに、何かひとつのことに一生懸命になれる新一が、大好きだ。

「らーんっ！」
突然視界が遮られた。蘭には、自分の目を園子が手で覆っていることは、すぐにわかった。
「園子！」
名前を呼ぶと、園子はいじわるっぽく笑い、蘭の横に腰を下ろした。
「どう？愛しの旦那が帰ってきた気分は」

「旦那って…そんなんじゃないってば！」
否定しながらも顔が真っ赤に綻ぶのは否めない。園子は口に手を当て、にんまりと目尻を下げた。
「おやおや…そのカオでよく言いますな」
「違うってば！」
「でもさ、よかったじゃない！これで二人を妨げる物は何もなくなったのよ！」園子の一言に、蘭は一瞬沈黙した。
「……ほんとに？」
その後の意味深な言葉に、園子は理解しきれなかったらしく、蘭は首を横に振った。
「ううん、なんでもないよ」
「…新一君が帰ってきて、早二週間……蘭、そろそろかもよ？」
なにが？と、蘭は唾を飲み込んだ。
「告白よ！こ・く・は・く！」
「ええっ！？な、ないわよ！」
驚きに目を見開いた蘭の頭上には蒸気が沸いていた。さっきより真っ赤になった頬を、必死に戻そうとした。

「あっちー」
新一は胸元をパタパタと扇ぎ、少しでも風を送ろうとした。ようやくプレーが終わった。結局最後までやってしまった新一。グラウンドの端で、自分の帰りをひたすら待っている蘭の元に、申し訳ない心持ちで彼は走った。
「蘭、わるいな…。待たせちまって」
新一が、「帰っててもよかったのに」と付け加えると、蘭は「いいの！」と言った。

少しムキになった蘭に首を傾げながら、新一は運動着から制服へと着替え出した。ちょっと意識したのか、蘭の視線は地面を泳いでいた。

「帰ろーぜ」

「うん！」

こんな会話で、ヒューヒューだなんて冷やかしの声が飛ぶのは日常茶飯事。

「ちげーってのに…」

新一は至って冷静に、呆れたように否定した。

まもなく沈むという夕陽が、最後の光でふたりの背中を照らしていた。幼い頃から歩いてきた河原を家路として、今日も二人で歩いていた。たわいもない話の傍ら、蘭は物思いに耽っていた。

親友の一言は大きかった。“告白”か…。深く考えてはいなかった。新一が盗られてしまうことに、ひたすら不安を抱いてただけだった。私は新一とそういう関係になりたい――けど、新一は？新一がそういう想いを少しでも持ってくれてるなら、いつか言ってくれるはず――好きだと。もしそんな想い微塵もなく、私が待ち続けているだけだったら、永遠にこのまま……幼なじみ。

「蘭？」

新一は蘭の顔を覗き込んでいた。

「えっあっ…新一！今日の夜ご飯、私が作ろっか！？」

あちゃー…突拍子もないことを言ってしまった。けど満更悪いことでもないんじゃないかな。蘭は思い直した。

「…あ、ごめんな。夜ご飯は先約があるから」

「先約？」

「ああ。悪いな…」

先約？夜ご飯に…先約？誰と？

ぐるぐる駆け回る疑問。

断った新一の顔が、どこか楽しそうだった。

Ｆｉｌｅ１７（後書き）

以前書き溜めたものを工夫して試行錯誤。蘭ちゃんが主でした。いつもありがとうございます。次回もよろしくお願いします。

File18

春の暖かな風が心地好く体を包んだ。歩く度に背中を押す順風は、私を強くしてくれた気がした。
利用したことなんて数回しかない電車に、当惑しながら乗る。
以前博士やあの子達と一緒に出かけた時に購入した、リング付きのメモ帳を開く。やや殴り書きした文字――私の字だが――は、これから行く先の住所。

電車と言えばラッシュなんてイメージしか持っていなかったけど、この電車はガラガラだった。
手摺りの隣、端の席に座り、向かい側の窓を眺めた。見ていても景色なんて速く流れてしまって、全くの無意味。

宮野志保になったからには、新たな道を進むと決めた。
これから行く先は、きっとそれに繋がるから。

都心から少し離れたところに大学はあった。割と大きく圧倒されている自分がいる。ここを前もって調べて来なかったことを後悔した。
キャンパスでは私服の学生がノートに何やら書き込みをしている。友人と楽しげに話すもの。掲示板を見てるもの。今の時間は、講義の間の休憩なのか、キャンパスには人が多かった。

と、途端に皆が作業をストップさせた。
見られていることは、すぐにわかった。ハーフだから、変わった髪色だから、なんて理由で視線を浴びるのことには、もう慣れていた。志保は、ヒソヒソ話も、遮りたい視線も無視しながら建物に入って行った。

「すみません、北見教授の教授室はどちらですか」
呼び止めた警備員の男性は、照れた顔を繕い、快く案内してくれた。この女性が誰かなど、一切問いもせずに。美人から話かけられたことに浮かれている。
「北見教授には、何の用で？」
歩きながら男性は聞いた。
「北見教授の知り合いの妹で、今日は北見教授に尋ねたいことがあるんです」
志保は適当な理由をつけた。あながち嘘でもないから良しとする。
「そうですか……あ、こちらです」
確かに“薬学部部長北見伸輔”という札がかけてある。それを確認した志保は、小さく、いつもの無愛想ながら言った。
「…ありがとうございます。あとは結構です」
「北見教授の了解はとってありますか」
「はい」
「そうですか。今頃はいらっしゃると思いますので」
警備員の姿を見送ってから、ドアをノックする。
「…どうぞ」
低くも温かみのある声に、志保はその北見教授の顔を不器用ながら想像した。扉を開くと、すぐに想像通りの人物であることがわかった。
「おお…君が志保君かね？」

白髪と黒髪が混じり、灰色に見える頭。老眼の丸眼鏡をかけ、セーターの上に白衣を重ねていた。
「そんなところで止まってないで！入りなさい」
叔父の家に遊びに来たような待遇だった。顔を輝かせ、北見研究資料らしいファイルを棚に戻すと、志保を事務的なソファに座らせた。このようなことに馴れていない志保は、どう対応すれば良いかわからなかった。手慣れた手つきで、彼は緑茶を煎れ始めた。
「お茶でよかったかな？――ああ、もう煎れてしまっていた。これで我慢しておくれ」
ポットのお湯を使い、すぐさまお茶は出てきた。
「…ありがとうございます」
「明美君の妹さんだね？大きくなったなぁ。明美君には、よく君の写真を見せられていたよ」
「お姉ちゃんに…」
「ああ、そうだよ」
教授はにっこり笑った。彼は教授らしくない、友達のような教授だった。
「今日はどんな用かね」
……本題。志保は姿勢を正した。大事な話――彼はきっと怪訝な顔をするはずだ。
「…わたしを、ここで雇ってください」
「雇う？」
「ここでは薬学部で薬の研究をしていらっしゃいます。私は薬の研究をしたいのです」
北見教授は黙って耳を傾けていた。志保は続けた。
「薬に関する知識には自信があります。事務員でも何でも構いません。働きたいんです。そして――研究をしたんです」
「何故そこまでに？大学は、簡単に人を雇えるもんじゃないんだよ」
「…行方も経歴も明確ではないのに急に現れて――信用していただけないのは無理もないです。

私は汚れてるから……ここで働けば、きっと人を…そして私を救えると思ったんです」

＊

帰りは割と電車が混んでいた。久しぶりの遠出に、志保は疲れていた。スーパーに寄って、家路を歩いている頃。日が長くはなっているが、空に欝すら星が瞬いていた。
彼は心優しい老人だった。自分の意味のわからない理由にも、黙って耳を傾けてくれていた。「わかった、今度また電話するよ」どうなるかはわからないけど、後は待つだけだった。

志保は袋を片手に、家が視界に入ると、顔を綻ばせた。早く夜ご飯を作らないと。きっと博士がお腹を空かして待っている――。娘のような日々が、当たり前に過ぎていく。
ずっとここで暮らせたら。過ごしていく一日一日が、気持ちを膨張させていく。
帰る家がある、というだけで、人はどれだけ頑張れるのだろう。
志保が頼めば、きっと快活に笑って「あたりまえじゃよ」なんて博士は言うはずだ。そして私は幸せに浸って、笑い返して…。
それは紛れも無い甘えと逃げ。
ここにいたら、進めない。前へ進めない。
そして彼の傍にいたら、おかしくなりそうだ。

取っ手に手をかけ、溜息をつく志保。

嫌な予感を背負い、違うことを願ってそれを振り払う。あの人はいつまでも、何も知らずに、志保を苦しめる。
鈍感なんだ。女心には。

ドアを開ければすぐにリビングがある、変わった造り。何かのBGM、芸能人の声が聞こえる。テレビがついているようだ。

「博士ただいま」
「ああ、おかえり。哀君」

振り向いた博士を見てから、志保は顔を引き攣らせた。
――新一がいたから。
当たり前とでもいいたげに博士の隣に座ってテレビを見ている。

「……なんでまたあなたがいるのよ」

荷物を下ろしながら志保が口を開くと、新一は笑って振り向いた。

「おー、宮野おかえり」
「また夕飯の催促かしら」
「当たり！お前冴えてんなー」
「馬鹿にしてんの？」
「違ぇーよ！」

新一は、数日前から立て続けにご馳走（とまでは言えないが）をありつきに来ている。
きっと何の意図もないのだろう。ただご飯を食べられる便利なお家としてしか捉えてないのだ。自分ばかりが深く考えている。
虚しさ半分に、志保は黙ってキッチンへと向かった。

「……」
新一はその背中を見つめた。そして博士の変な視線を感じると、バツが悪そうに再びテレビへと戻す。
「なんだよ、博士…」

冷蔵庫にあった素材も使い、夜はシチューとなった。
「相変わらず料理はうめーなぁ…」
「まったくほんとじゃよ」
博士もつられて言う。
「これでもうちょっと食事に寛大だったら、言うことなしなんじゃが…」
「これ以上メタボッたら許さないわよ」
「じょ、冗談じゃよ…ハハ」
新一は料理を口に運びながら、シチューと志保を交互に見た。その意を感じとった志保は、新一をジト目で見返した。
「なによその目は。……私だって練習したもの。初めは下手だったに決まってるじゃない」
「お前の下手な料理も食ってみてーかもな」
「あなたって悪趣味ね」
「そうかぁ？」

しばらく口を結んでいた志保が、突然口を開いた。
「……ねえ、工藤君」
新一は手を止めた。志保は何とも言えない複雑な表情だった。

「どした？」
「…なんでもないわ」
「どうしたんだよ」
新一は尚も追及しようとしたが、諦めたように、皿の片付けをし始めた。

Ｆｉｌｅ１８（後書き）

長くなりました；
お気に入り登録や評価ありがとうございました。励みになります。
次回もよろしくお願いします。

Ｆｉｌｅ１９（前書き）

不安作ではございますが、ご覧ください。

File19

誰と？
なんてわかってるよ。
簡単な話なのに。
認めたくない自分がいて、どんどん謎を深めていってる。

ねぇ彼女は、まだ私の言葉を覚えてる？
約束……覚えてる？

ザーザーと外では止みそうにない雨が音を立てている。窓外は水滴でびしょ濡れ。朝からずっとこれだから、誰も今さら気にしているわけでもない。病むのは仕方のないこと。
斜め後ろの机に、伏せって昼寝を堪能している新一をちらりと見た。気持ち良さそうに寝ている。昼休みなのに、お昼ご飯も食べないで。起こすのも気が引けるから、新一はお昼抜きってことだ。…せっかく作ってきたのに。
……疲れてるのかな？
寝顔を見て、不覚にもかわいいと思った自分が恥ずかしくなる。

最近、新一はつれない。

「どうしたの？」今日は珍しく購買のパンが昼食らしい園子。メロンパンを口に頬張りながら、話しかけてくれた。

「暗い顔なんかしちゃって」

「最近ずっとじゃん？」なんて一言に、そんなことないよ――なんて意味のない否定をする。

「新一君に話し掛けないの？」

「ね、寝てるし…」

「うーんそっか」

園子が傍に来たためか、抑えてたものが一気に溢れ出した。

「…なんかもう嫌……ノイローゼにでもなっちゃいそうで。バカみたいだよね」

震える喉仏、治まってよ。
口を開けば溜息ばかり。
そんな自分に嫌気がさして。
たった小さな出来事だけなのに。積み重なって荷物ばかり増えていく。バカみたいに。

「新一……夜ご飯、一体誰と食べてるのかな」

「夜ご飯って？それってどういうこと？」

「ご飯作るよって誘っても、用事があるんだって……それだけで……」

「なにそれ！！それって女でしょ！？」

「そうなのかな…」

呟く蘭は上の空だった。憂鬱げな瞳で、窓を叩く雨をしきりに見ている。

園子は蘭の性格を知っている。何年も親友をやっているのだから。自分とは違い、男を甘やかすことばかりする。それが彼女の長所であり、短所である。だけど、それが災いして、いつか後悔しないでほしい。

考えを巡らす園子の脳内に、途端にいい案が浮かび上がった。

「そうよ！」

「えっ？」

欝な蘭も園子を見た。

「今度、鈴木財閥で新事業の記念パーティーやるのよ！東京から小笠原まで1日かけてのクルージング。そこに新一君も呼んでみたら？大海原を船で渡ってりゃ、新一君とふたりきりになれるチャンスじゃない？」

「ふ、ふたりきり…！？」

“ふたりきり”そんな珍しいことでもないはずだが、何を意識したのか、蘭は頬を紅潮させた。園子は自分の計画に満足したのか、ニヤついて顔で頷いてみせた。

「蘭！新一君が来ないなら、こっちからアタックしなくちゃ！待ってたって幸運はやってこないんだから！アクションを起こすのよ！」

顔を赤らめていた蘭だったが、園子の一言に押されたのか、「うん！」と力強く言った。

新一が何かを伝えてくれると思ってた。けど、それは都合のいい空想だ。落ち込んでは、起き上がる。その繰り返し。

部活を終えた蘭は、急いでスーパーへと走った。

＊

警察の依頼が舞い込んだ今日。事情聴取の立ち会いを終え、気づけば晴れていた空の下、警視庁から家路を歩いていた。

「……腹減ったな」

ぽつりと呟く。

昼はろくに食べずに眠りこけ、その後早退し、捜査をしていたものだから。腕時計に目をやると、針は7時を回っていた。

「…はぁ」

大概独りで歩いてれば、考え事をするしかなくなるだろう。俺もその方向に追いやられた。今日の出来事を思い返してみるが、ぽっつり浮かんだのは蘭の顔だった。

――最近、蘭から視線を感じる。それは、どこか寂しげな色で。俺は蘭に何かしたか？

ついでに園子には何やら殺気立った視線を感じる。一体俺は何をしたんだ。

考えても解決しそうになかったので、諦めて体の生理的欲求に応えることにした。ああ、なんでパンのひとつも買って来なかったんだ。ひどく後悔した。家に食べるモンなんかねーぞ。……宮野んとこにでもお邪魔になるかな。

そう思った時だった。

家の柵によっ掛かっている蘭を見た。

「ら、蘭？」

薄暗く、確証はなかったので、らしい人物に呼び掛ける。

「新一…！」

当の人物の声がパアッと明るくなったことには、俺にも気がついた。

「こんなトコでどうしたんだよ？」

「新一、食べる物ないかなぁって思って。ご飯作りに来たの」

にっこりと笑って、蘭は、スーパーの袋を俺に見せた。

「そうか。わざわざありがとな！…ちょうど腹減ってて」

「へへ、でしょ？」

とりあえず家に入ると、蘭は早速エプロンを着て料理をし始めた。
その姿が宮野と妙に重なり、俺は首を傾げた。思えば、こんな光景久しぶりな気がする。近頃宮野に世話になってばっかだった。

「ちゃんと食事してた？」

「ああ、晩飯はバッチリだったぜ」

「晩飯は、って……じゃあ他はどうなのよ」
呆れた面持ちで彼女は言った。
「新一、できたから運んで！」

「あ、オゥ！」

いい匂いが嗅覚をつき、腹を刺激していた。

「いただきまーす」

「どうぞ召し上がれって言いたいとこだけど、私も夜ご飯まだだからご馳走になるね」

蘭は俺の向かい側に、茶碗を持って座った。
蘭とこうして食事をするのは、ひどく久しぶりだ。コナン時代、再び新一として戻った今となっては今日が初めてじゃないのか。
肉じゃがを食っててても、蘭の味が懐かしく思えた。しばらく食べていた志保とは、また違った味。どっちも美味くて、上下もねーけど。
好みは……

「ねえ、」
蘭が途端に口を開いた。
「ん？」
味噌汁から目を蘭へと移す。
「あのね！園子の家がね、新事業に進出するみたいで、その記念パーティーをやるみたいなの！」
「ふーん」
「でね！そのパーティーにお呼ばれしたんだけど…」
「へえ、よかったじゃねーか」
適当な相槌を打っていた。
「新一も…行かない？」
「えっ俺も！？」
予想外の展開だ。
「だって考えてみれば新一とパーティーなんて行ったことないもん」
「何言ってんだよ。腐るほど行ったことがあるじゃ…」とまで言いかけて慌てて口をつぐんだ。
「えっなに？」
「いや、なんでもねぇよ」
繕うように味噌汁を口に含んだ。

やべーやべー…コナンと新一の境目がわからなくなってる。冷や汗のひとつやら流していると、で、どうなのよ？と蘭は顔を近づけた。

蘭の顔が至近距離にある。

そういえば蘭と出かけてない。

俺は蘭が“好き”…

伝えようと思ってたことも、伝えてない。

“そういえば”

なんて心にしまいつけて、思い出すことが多くあった。

蘭の目を見据えて言った。

「ああ、行くよ」

File20

好き
嫌い
愛してる
憎い

人は様々な感情を持つ。
他の多種に渡る生物とは違い、おそらくは地球上で最高の、複雑な感情を。
サルと人間は紙一重。
その感情の違い、ひとつが、人間が著しく進化した――サルとは区別される証でもある。

＊

「へえ～アイツらも行くのか」
新一は珈琲を啜りながら博士の言葉に頷いた。
「ああ、園子君から招待状が来ておってな」
少年探偵団はよく鈴木財閥のパーティーに呼ばれている身のため、わからなくもない。

「まあ保護者としてワシも行くのじゃがな。園子君には毎回感謝しておるよ。あんな小さい頃からパーティーに招待されるなんて、なかなか無いからのぉ」

「だな…」

「新一君は、蘭君から誘われたんじゃな？」

「ああ。近頃アイツとも出かけてねぇし……会話も少なかった気がしたから。行くことにした」

「ふぅむ、なるほどのぉ」

博士が唸り、その向かい側で、新一は携帯を取り出すと、無言で弄り始めた。

「どうしたんじゃ」

「うーん…今手がけてる事件の資料だよ。その場から持ち出すわけにはいかなくてさ。カメラで撮っておいたんだ。それを今チェック中」

新一の目が、一筋に真剣に携帯を見つめていた。

「工藤新一が世間に戻ってくるのに、そう時間はかからなかったようじゃのぉ」

学校へ通学するようになり、すぐにマスコミが嗅ぎ付け、工藤新一は生存していたことが全国ネットで広がった。そして、果てしなく消滅することのない“事件”をひとつ解決すると、休息の時を要し

ないほどに依頼は舞い込んできたのだ。

「…何とか忘れられてなかったみたいだな。有り難いこった…」

新一はやや、会話まで気が回らないようであった。

「パーティーのぉ…また志保君から厳しく食事管理されそうじゃわい」

「……あ、」

“志保”“パーティー”の単語に、新一にはふっと考えが過ぎった。

「なあ、博士。宮野はそのパーティーに行くのか？」

「志保君か？いや、行かないらしいよ…」

「そっか…」

と新一は呟くと、辺りをキョロキョロと見回した。

「あれ…博士、そういえば宮野はどうしたんだよ」

「ああ、志保君なら仕事じゃよ」

「し、仕事ぉ？」

新一は目を丸くした。

「志保君もな、ちゃんと新しい道を歩んでおるんじゃよ。今は働いておってな、れっきとした社会人じゃて」

「そうなのか…？」

初耳。
まったく聞いていなかった、知らなかった。アイツとは3日に一回は顔を合わせてるつもりだったのに。
嬉しさはある。新たな道を切り開こうとする志保に、嬉しさがあった。安心も押し寄せた。以前から彼女は戻ることへの不安を抱いていたから。
けど、それ以上に。それを上回るモヤモヤした気持ちがあって。素直に「よかった」と喜べない自分も存在していて。頭の中で格闘中だ。

新一は、もう一度携帯に視線を戻してはみたが、先ほどの集中力はもう消え失せていた。
「…やめた」
まるでおもちゃに飽きた子供のように、新一は溜息を吐くと、携帯を投げた。

「なあ、博士。とりあえず例のヤツ見せてくれよ」
「ああ、そうじゃった！今日はそのために呼んだのじゃ」
博士は懐から何やら細長い布を取り出した。
「なんだそりゃ…ネクタイ？」
「おお、そうじゃ！名付けて“ネクタイ型変声機”」
「はあ？それってもしかして…蝶ネクタイ型変声機のネクタイ版とかいうんじゃねーだろうな？」

「よくわかったのぉ。ほら、新一の制服の緑色のネクタイとそっくりじゃろう？これなら付けててもバレん」

「いや…バレんってか、もう新一なんだから必要ねぇだろ」

そうは言いながらも、新一はそのネクタイを貰うことにした。

Ｆｉｌｅ２０（後書き）

鈍いです、新一君。
次回はいよいよパーティーです。そろそろ急展開入れてやろうと思います。
次回もよろしくお願いします。

File21～part～1

「それでは！我が鈴木グループの繁栄と栄光を願って……乾杯！」
鈴木会長の一言で、会場にいる日本の政財界の大人達はグラスを上へと掲げた。
それは、一日かけてのクルージングが始まることを告げた。
鈴木財閥の新事業進出記念パーティー。さすが鈴木財閥と言いたくなるような規模だ。天井に光るシャンデリア。豪華な料理に、有名人――というより、日本の財産家がたくさん集まっていた。
この中に嫌々仕事のため仕方なしに来てる者は恐らくいないだろう。豪華な個室が割り当てられ、夜にはゆっくり睡眠を摂れるようになっている。
そんな中、小五郎は待ち兼ねていたように、手にしたワインをぐびっと飲み干した。

「もう！あんまり飲み過ぎないでよ、お父さん」
蘭はいつもの要領ですでにぐでんぐでんの父を嗜めた。
「大丈夫だって」
小五郎の傍で、二人のやりとりを眺めていた新一は、呆れた視線を投げた。コナンの頃から経験はしていたが、久々に会ったこの男、相変わらずのようだ。
「新一も何か言ってよ！」
ふいに飛んできた火の粉に、新一は目を丸くする。
「えっ」
「おい、探偵坊主！なんでお前がここにいるんだよ」
「わたしが呼んだのよ」

「おい、おまえ。蘭に何か手ぇでも出したんならただじゃおかねぇぞっ！」
蘭が顔を真っ赤に染めた。
「おいおい…」
何かってなんだよ。新一は汗をかきながら否定した。
「もう！なに言うのよ、お父さん！」

…でも、何か新一がしてくれるといい――そんなよからぬ考えも心の隅にあって。ねえ、なにか言ってくれる？そのつもりで私はいるよ？新一はどうなの？
ううん、そうじゃなくても。わたし今日は覚悟を決めてきたの。

「蘭？」
ふっと現れた新一の顔に、蘭は慌てた。
「な、なんでもないわよ！？べつにそんな！好きとかじゃないから！」
頭をぶんぶんと振る蘭に、新一は首を傾げた。
「はあ？なんだそりゃ」

「あ～いたいた！」
その時、いつもの声が聞こえた。黄色のドレスに身を包んだ園子が、手を振って、こちらに走ってきた。
「おっ！亭主も一緒じゃん」
茶化すギャル系お嬢様、園子も、めかし込んでるせいか、心なしか上品に見える。
「園子かわいい！」
蘭は思わず言った。
「ありがと！蘭もその新しいワンピース似合ってるよ」
今日蘭はキャミソール型の白いワンピースを着用していた。先日買ったばかりの。

「ほら、亭主もなんか言ったらどう？」
「なんかって？」
「あんたバカ！？」
どこまでも鈍い新一に、園子は鋭く突っ込んだ。
「…ああ…その、似合ってんじゃねーか…」
新一がキョロキョロしながら覚束なさげに言うと、蘭は俯いて顔を赤らめた。
「あ、ありがと」

「わたし、挨拶してこなきゃいけない人がいるから行くわね！それじゃあおふたりさん、ごゆっくり～」
わかりやすい嘘に、蘭は素直に感謝した。今回のパーティーの件も、感謝してるよ。その分、楽しまなきゃダメよね。蘭は気合いを入れ直すと、新一を見た。
「新一のスーツ姿なんて久しぶりだね」
「そうだな。ってか、オメーとこんな風に一緒にいること自体久しぶりだからな」
「に、似合ってるよ…？」
蘭の一言は意外で、新一は少し戸惑った。
「お、おー、サンキュ」

＊

なんで来たの？

力づくでも断ればよかった――それは今さら遅いこと。

自問自答してわかったのは、私の甘さだけ。未練たらたらな自分に苛立つ。
まだ、ずっと。
彼と彼女を見てるだけで、こんなにも苦しい。「好きだ」という気持ちを、憎いほど自分で証明してるんだから。
大バカだ――。

パーティーになんか来ていない。この場に存在しない人物として過ごす。これは私の使命。
もう邪魔をしたくないの。
ふたりの道を妨げたくないの。

それに「約束」があるから。私は絶対に、ぜったいに……。

＊

「蘭お姉さん！」
自分の名前を呼ぶ声を聞くと、蘭は辺りを見回した。すると、向こうのテーブルから、めかし込んだ格好の歩美、光彦、元太が駆け寄って来るのが視界に入った。
「あら、みんなも来てたの？」
「うん！そうだよ！」
「園子さんに呼ばれたんです」
と子供らしく返す歩美と光彦はよいとして。元太だけは、両手にチキンを持ってかぶりついていた。その光景を、蘭の横で見ていた新一は無性に懐かしくなった。

「あれぇ！蘭お姉さんの後ろにいるのって…」
「高校生探偵の工藤新一さんじゃないですか！」
三人の少年探偵団にも、やはり有名人だったらしく、新一を見ると興奮しだした。
「よお！オメーら元気にしてたか？」
新一のやや馴れ馴れしい一言に、三人はひそひそと内緒話をし始めた。
「やっぱり…歩美たちって、新一お兄さんとそんなに会ったことないよね？」
「はい。それにしてはフレンドリーというか…」
「まるでコナンみたいだな！」

「おいおい、またかよ…」
コナン時の省かれた記憶が蘇り、新一は苦笑いを浮かべた。
「新一、この子達とそんな仲よかったっけ？」
蘭が首を傾げた。
「へ…そうでもない、な…」
「あ～っそうだ！ふたりとも早く捜さないとダメだよ！」
歩美が思い出したように、手をポン！と叩いた。元太はチキンを食い契って言った。
「おっ、忘れてた！」
「じゃあ、お暇するとしましょう！」
新一と蘭の元から走り去ろうとする三人を、新一は止めた。
「何を捜すんだよ？」
「歩美たちと一緒にパーティーに来たお姉さんだよ！博士が行けなくなっちゃったから、お姉さんが一緒に連れて来てくれたの！けど、さっきどこかにいっちゃって…」
「え…そのお姉さんって…」
「志保お姉さんだよ！」

Ｆｉｌｅ２１～ｐａｒｔ～１（後書き）

パーティー編ということで、ｐａｒｔを設けました。
今話は私のふつつかな文を特に実感させられました；すみません。
次回もよろしくお願いします。

File22～part～2

「宮野が？」

来てるのか？

「志保お姉さん探してこようっ！」

そう言うと、歩美達は競うように走り去って行った。志保お姉さん……確信的に、間違いなく宮野だ。

……来て…たのか。

驚きと僅かな喜びが混じった妙な気分で、歩美達3人の背中をぼんやりと見つめていた。

「宮…野…さん？」

蘭が意味深な顔を出しながら、か細い声で聞いてきた。

「今、博士ん家に住んでるヤツだよ。この前言わなかったか？」

「そうだっけ…」

「蘭どうし…」問いかけて蘭を見つめ返すと、蘭の瞳は虚ろに開いていた。思わず口をつぐむ。

ったく…。

「ほら！なんか食おーぜ！」
丸テーブルに置かれたオレンジジュースを、蘭にぶっきらぼうに差し出す。蘭は戸惑いながらも、笑顔で受けとった。

＊

園子は遠目で眺めていた。
今回のパーティーをしかけたのは、元はと言えば彼女である。二人になるきっかけを作ってみて、遠くで二人を静観する。
そう、いつまでもじれったい関係。
羨ましい程の純愛は、自分が引っ張らないと、いつまでも歩みを進めようとしない。ずっと見てきた彼らの関係。工藤君がしばらく姿を消し、戻ってきた。この長い間に、ふたりとも心変わりをせずに……せずに、今に至る。きっと大丈夫だ、ふたりなら。あとは幼なじみに終止符を打てるか、打てまいか。

「ああっ…もう！」

園子はパチンと指を鳴らした。
新一と蘭の良い雰囲気に、ガキンチョ共がやって来た。って、自身が呼んだから仕方ないか。
たまに色男のボーイに目をやったりしながら、ガキンチョが消えるのを待った。ガキンチョ共は三人……やはり少し物足りない気もする。

以前はあの三人の中に、大人同然、私達以上のオーラを纏った少年と少女がいた。
江戸川コナンと灰原哀。正直偽名としか言いようがない名前だ。この二人はいつも、周りを見据えていた。的確な発言、豊富な知識、子供とは思えない態度、行動。
海外へ転校……。ふたり一緒に？偶然？ばかみたい。遠い親戚ではあると聞いたが。謎は謎を呼ぶ、とは彼らのこと。それでも深入りはしないようにしてきた。
…と、ガキンチョが去って行った。再びふたりになったけど…、なんだか様子がおかしい。会話が聞ける距離じゃないのがもどかしい。

「やばっ」

こんな不安な状況下で、トイレに行きたくなった私は大バカだ。

「確かこっちよね…」

廊下に出て、あやふやな記憶を頼りにお手洗いを探す。船内は無駄にでかい。蘭よりは方向音痴じゃないと自負してたけど、実はわたしも結構なものだった。
ようやく見つけた“お手洗い”に、園子は一目散に駆け込む。
数ある磨かれた光沢のあるトイレの中に、誰ひとりもいなかった。
とりあえず悠長に考えてる暇はないため、手頃な個室に入った。
用を済ませ、水道で手を洗う。何気なく鏡を見た時、トイレに入ってくる女性が映った。
あ…

ただ一筋に。園子は、綺麗だと思った。一瞬、たった一瞬、それだけで強く頭に刻まれる。
変わった髪色に、外人混じりの顔。そしてやや高い細身の身体。
女性と鏡越しに視線がぶつかった。なんだか見てはいけなかった気がして、目を落とす。女性の顔が、自分を見て強張った。私を知ってる？

“あの人どっかで…”
その思いが頭からくっついて離れずに。

女性の瞳が、
やけに寂しかった。

Ｆｉｌｅ２２～ｐａｒｔ～２（後書き）

久々の更新です。汗
駄文で申し訳ないです。

File23～part～3

「ば、ばか！ふざけんじゃねーよ！」
驚愕と怒号の声は、夜9時を回ったルーム前の廊下で響いた。ほのかな赤い顔で否定する新一を置き、園子は何の悪びれもなく笑い飛ばした。
「なーに焦ってんのよ！」
新一は、受けとったルームキーを如何わしげに片手でつまみ、見つめた。
たった一個のルームキーは、高校生思春期盛りの二人が、閉ざされた空間で一夜を過ごすということを意味していた。
9時を回っていた。パーティー中に蘭がジュースと間違ってお酒を飲み干すという事件が原因で、部屋で休むことになったが――部屋鍵の催促によるこの展開。
新一は酔いで正体をなくしている蘭を背中におぶりながら、「オメー何企んでんだよ」と園子を見た。
蘭は新一の背中でへへへと笑いを浮かべている。
「べつに？何も企んでなんかないわよ」
園子自体、当初こんな予定はなかった。……ただ、嫌な予感がするだけ。女特有の、あの勘に頼っているに過ぎないものだが。それでも、あの女性を見てから。そこに舞い込んだアクシデント。利用してみよう、直感した。
「ほら、蘭のこと介抱してやってよ！」
園子は新一を無理矢理部屋に押し入れた。

新一は息を吐きながら部屋に入った。真っ暗な為、手探りでスイッチを押すと、オレンジ色の淡い光を放つ小さな照明がぱっと着いた。ホテルの一室といった具合で、ベッドは2つ並んでいた。
「仕方ねーな…」
新一はルームキーをテーブルにボンと投げ、ネクタイを緩めた。そして蘭を、ゆっくり片方のベッドに寝かせた。顔を真っ赤に、呼吸は荒く体は熱を帯びていた。
「新一ぃ…襲わないでよねぇ……」
「はあっ！？な、なに言ってんだよ！」
「冗談よ、冗談…」
笑いながらベッドに寝そべる蘭。新一は首を傾げた。蘭はやはり酒が回っているようだ。様子がおかしい。
「蘭、おまえ酒くせぇぞ…」
冷蔵庫で冷やされている水をコップに注ぎ、蘭に差し出した。しかし寝たまま飲む気配がないため、しかたなしに起き上がらせて水を飲ませる。
「ありがと……あのジュース、何ていうんだろ……飲んだら急にくらぁーってなっちゃってさぁ……へへ…」
ふらふらした口調を並べていた彼女だったが、気がついたら気持ち良さそうに寝息を立てていた。
酔ってるとこなんて、初めて見たな。新一はまじまじと蘭を眺めた。規則正しい寝息。ドレスを着たままのため、脚や肩の素肌の露出が見える。
目のやり場に困るので、新一は目を伏せ、彼女に布団をかけた。
「探しに…行くか」
そして新一はスーツ姿のまま、キーを掴み、部屋を出た。
ガチャ、鍵をかける音。蘭は寝返りを打つと、うつらな瞳で扉に目をやった。

＊

一通り宮野がいそう場所は探してみたが、彼女の姿はなかった。
夜にここまでして宮野を探したい、会いたいと感じるのは何故なのか。理由も何も自分自身がわからなかったが、気持ちに従うことにした。
最終手段として、フロントに向かうことにした。
「すみませんが、宮野志…阿笠博士は何号室ですか」
「少々お待ち下さい」
男性従業員は名簿をめくりだした。俺は待ち時間の間に広い豪華なロビーを見渡した。
「でっけぇなー」
ふと、噴水付近に見覚えのある背中が見えた。間違いない、とすぐに確信を持てた。
……見つけた。
「宮野！」

＊

「子供は寝るのが早いわね…」
元気な声をあげていたと思えば、もう静かに寝付いている。
船内の大きなロビーには、小さな噴水とブロンズ像が一体建っていた。その彫刻を見てることに、特に意味はなかった。ただ、眠れな

い気持ちを埋める物でしかないのだから。
「苦しい…」
苦しい。
想うことが、苦しい。
伝えられないことが、苦しい。
消去しなければならない気持ちは、消えされずに、彼の残像と一緒に心に居座り続けて。
持つことすら許されなかったのに。
解放した後は、伝えられないこの現状が苦しい。なんて贅沢な。

工藤君と蘭さん……今頃…何をしてる？

パーティーの間、ここに居る時、何人か男性が声をかけてきたけど。
それより。工藤君の声が聞きたかった。

「宮野！」

聞こえたのは、
そう、工藤君の声。

振り向いて見えたのは、
彼が走り寄ってくる姿。

Ｆｉｌｅ２３～ｐａｒｔ～３（後書き）

あまり見直しを行ってませんが、お許しください。一気にできました。
次回から波乱な展開かと思います。ｐａｒｔ編は７話くらい続くかもです。
次回もよろしくお願いします。

Ｆｉｌｅ２４～ｐａｒｔ～４

心地好く響いた声に、安心を得たのも、喜びを得たのも、どちらも動かし難い真実。隠れるのも、もう無意味だと悟り、志保は近寄る新一をぼんやりと見た。
会いたいと願えば願うほど、浮かぶのはあのひとの顔。そして、彼を目の前なした今でも――浮かぶのはあの女性。
新一は志保の腕をパッと掴み、息を切らせながら呟いた。

「やっと見つけた…」

誰に言うでもなく。

「……工藤君」

「宮野、オメー来てたんなら少しぐらい顔だせよ」

新一の笑み、志保は目を逸らした。そして彼女は新一の手を軽く振り払った。

「何であなたに指図されなきゃいけないのよ」

いつもと感じが違う。
冷たさを通り越した鬱陶しい感情が見えた。新一は思わず表情を強張らせた。

「おい宮野…」

「あなた何様のつもり？」

「何様って…」

「あなたは私の何なの？私はただ博士の保護者役として来ただけ……あなたは私の何モノでもないでしょ。同じく私はあなたの何でもない。…私のやることにいちいち干渉しないで」

新一にかける言葉を探す間も与えずに、志保は「じゃあね」とだけ言った。

志保は、自らの冷えた腕を解くと冷静に歩いて行った。新一は立ち尽くし、彼女の背中を見つめて呟いた。

「オレは……ただ…」

＊

蘭は虚ろな瞳で携帯のディスプレイを見ては、溜息を吐いて閉じた。酒は抜けてきたようだが、まだ完全ではない。判断能力も、思考能力も、すべてが正確とはいえないけど、すべてが素直といえそうだった。

携帯に映った人物の名を今思うならば、「憎い」と。その感情が込み上げてきた。こんな嫌な自分がいたのか。それでも、何故かこの感情を責める気にはなれなかった。

「新一…なんでいないのよ…」
無性に寂しかった。
きっとアイツに会いに行ったんだ。
アイツは私の言ったこと守ってるのかなぁ？
アイツさえいなければ……私がこんな不安に陥る必要もないのに……。
今は何時かなぁ…１１時過ぎ。
「そろそろ帰ってきてよ……」

ガチャ

鍵穴を弄る音がした。
ああ、帰って来たんだ。

スタンドのオレンジ色の明かりが際立つ、真っ暗じゃない、大きくもない部屋の中。欠伸すら目を開ければ、新一の思い詰めた顔が見えた。
新一は私の方を見た。寝てるのか起きてるのか、その確認？
もう…面倒くさい。
「……おかえり」
目をぱっちりと開いて言う。
「起きてたのか…」

新一は驚いた顔をした。

「どこ行ってたの？」

知ってるくせに。執拗に、故意に問いかける私はひどいね。

なんで疲れた視線を反らすの？そんなに罰が悪いことなんだ？

言えばいいじゃない。

宮野志保に会いに行ってたって……。私は新一の恋人じゃないんだもん。何が新一を思い止まらせるの。

「いや……喉が渇いて…」

「2時間も…？」

嘘が下手だ。

「新一…好きなひといる？」

不意に繰り出した私の一言に、新一は目をまるくした。

「何言ってんだ…蘭…」

間髪を入れず、蘭は新一を押し倒した。男の新一も驚くような強さで。

新一に馬乗り状態。

「らん…」

新一は呆然と、大きく開いた目を私に向けていた。私だって普段な

らできないよ、こんなこと。アルコールのせいだ、きっと。

新一が下にいる。

薄暗いせいで、表情はあまり読めない。私の息が荒い。それでも、私は感じ取れる。あなたの微妙な変化を。

「好きな人なんて…」

不意の涙は、流れずに目に溜まった。

「…私は、こんなにもはっきり言えるのに…」

「え…？」

「新一が、好きだって」

File24～part～4（後書き）

ちょいと展開早過ぎですね。汗
蘭ちゃんの酔いを感じていただけると嬉しいんですが。文章が及ばずです。

最近忙しいや、犬夜叉再ブームにてコナンから遠ざかっております。
何だか「コナン君久しぶり！」な気分です。
文は相変わらず短い……。
次回もよろしくお願いします。

File25～part～5

『新一が好きだって』

「……な…」

不意打ち。

いつかは来るとは思ってた。
昔から漂う雰囲気を一転し、恋愛関係を築く時が。確かなものはなかった。けど、それは自然な流れでいつか訪れるはずだと。その境が、今日、たった今やって来ようとは。

それだけじゃないんだ。
――頭がついてかねぇ。

こんな体勢。
蘭の目は真実で、澄んでいて。わずかな焦りが隠れ見えた。

半ば酒？半ば本音？
蘭がこんな大胆なことをするなんて、絵空事のような現実。

「……答えてよ」

言えばいい。『うん』と。『俺も好きだ』と。
……何故躊躇う。

あわよくば、ドレスのせいで半裸状態。けど、あまり発情したりしないんだ。

「…蘭、とりあえずどかねぇか？」

「……いやだよ」

蘭の涙声。
新一は目を見開いた。
蘭の瞳から涙が零れた。

「答えてくれるまで…」

蘭は新一に抱き着いた。
新一の頬を、蘭の髪がさらさら掠めた。

――忘れていた。
蘭の気持ちを。

胸の内で泣く彼女がいて、やっと思い出した。蘭は待ってたんだ。
俺が『想い』を伝えるのを。

『待っててくれ』
『俺はおまえが…』

いろんな言葉を重ねてきた。
でも核心的なことにはいつも触れない。

不思議だ。戻ったら真っ先に会いに行って、真っ先に伝えようと、
あれだけ望んでいたはずなのに。俺は蘭に真っ先に会いに行ったか
？真っ先に……何を言った？
その望みさえも、いつの間にか忘れかけている。

自分の気持ちが、わからない。

今胸を侵食していくのは、あれだけ待たせた蘭への、申し訳ない気
持ち。

覚醒したように、蘭の身体を起こした。不安げに眉を落とす彼女の
力は弱くなった。

「俺は……蘭が好きだ」

＊

蘭は濡れた目を輝かせ、顔を上げた。

「しんいち……」

ウソ、ホント？

自分が促したくせに、返された言葉に平常心を乱す。

同じく乱れたベッドの上で、新一と向かい合いながら。新一は真っすぐ私を見ていた。

きっと真っ赤だろうな、なんて思ったりして。今さら酔いが覚めましたなんて理由は吐けそうにない。

「ほんと？」

「ああ」

その肯定が、子供をあやすような優しげな顔に見えた。

＊

今朝、意地悪げに鳴った携帯を、片手にぎゅっと握りしめた。

呼び出しには嫌な予感が過ぎったけど、私は行かない訳にはいかない。昨夜彼と逢ったこの場が待ち合わせとは、当てつけかと思う。

寂しげな動揺が胸を打つ。
６時、朝早くからフロントには従業員が、クラシックのＢＧＭの中で仕事をしている。噴水の水は夜から止まることなく流れ続けていたのだろう。

彼女はきっと知っている。
私が工藤君と会っていたことを。この船に乗り合わせていたことを。

ふと、右腕を見つめた。
工藤君の体温が今でも残ってる。追憶の中。声と姿の残像が同時にプレイバックする。
何度あなたに触れられただろう。いつも私に触れ続けた、その手は優しかった。何気なく、だけど強く、私はいつも守られてた。
その温かさは、今でも消えることなく残ってる。
あなたはいつも衝動だから。偽りはない。
昨日は冷たく突き放した。これが……最善だった。

「……おはよっ」

こんな時間にここに来るのは彼女しかいない。振り向くと、そこにいたのは、やはり彼女だった。

「蘭さん…」

思いの外輝く彼女を見て、何があったのか、推測は容易だった。

「ごめんね、こんな時間に」

「いえ、別に」

…余裕？

「なんだか二人で喋るの、久しぶりね」

「…そうね」志保は、何ら感情を込めずに呟いた。

「あっ…ほら！ここから！景色が見えるの！」

蘭は噴水の隣の、窓際に駆け寄った。窓からは外のデッキと、向こう側の海原が見えた。朝日が海を照らしている。

「まだ寒いけど…出てみる？」

「…遠慮しておくわ。それより用件を言ってくれない？」

「相変わらずなんだから……」

蘭のわざとらしい溜息。

「新一はまだ寝てるよ」

「…そう」

「同じ部屋なの」

志保の一言に、蘭は伺うようにして志保を盗み見た。

「あなたは約束守ってくれたみたいだね」

約束――忘れたなんて言えない。あれはまだ灰原哀の頃。喫茶店で

あなたに全てを告白したあの時、私はあなたと交わしたことがある。
今でも鮮明にそして強く。
『新一に近づかないで』
「おかげで、新一と恋人同士」
感情を押し殺すことの限界。
「…恋人？」
彼女のポーカーフェイスが僅かでも崩れたことに、蘭は半ば安心の感覚を覚えた。
覚悟が、未来が、現実になる瞬間。汚い部分をさらけ出したくない。せめて胸の内で。
そうか――彼女は、これを狙ってたの。
「だから、恋人になっ…」
「……そう。おめでと」
蘭に背を向け、志保は言った。
糸が、ぷつりと音を立てて切れた。

Ｆｉｌｅ２５～ｐａｒｔ～５（後書き）

展開移り早くないですかね；

久しぶりに覗いてみると、お気に入り登録が驚くほど増えていました。ありがとうございます。感謝の限りです。

さて、蘭ちゃんと志保ちゃん。
訳ありな様子ですが、急すぎて理解不能な方もいるかと…。後々回想かなんかで取り上げると思います。
蘭ちゃん悪になりすぎてないか心配です。それだけです。

それでは次回もよろしくお願いします。

Ｆｉｌｅ２６（前書き）

蘭と哀の秘密の会談。
哀が志保に戻る前のです。

期間空きすぎたのでお忘れかと思いますが、以前の分かりにくい伏せんです。

File26

――追憶。

灰原哀、7歳。
春になりかけの、まだほんのり冬が尾を見せている季節だった。
これからどうするのかも、何をすべきかも、すべてがわからなくなってたあの時。
見えない何かを見定めようと、街を果てしなく歩いてた。
すれ違う人々を見ては、未来がぼやけるだけ。
道を照らしてるモノは何もない。
唯一の支えが自分の元を離れると悟った今。哀を取るも、志保も取るもすべてが自由。運命は私の手の中に。
だからこそ迷う。
たわいない人生なのに迷いが生まれる――そう、馬鹿みたいなこと。

「哀ちゃん…！」

ふと、かけられた声に、哀は相手が誰かすぐに分かった。きっと、

生まれながら体に備わってる何かだ。そして息をついて振り返れば、黒髪が柔らかな風に靡いていた。

「あなた…」

中々素直に名前が出てこない。捻くれ者だと哀は自嘲した。縁のないと思ってた感情に、こんなにも左右されてる。
蘭への嫌悪。哀は無意識のうちに純粋な接し方に拒絶していた。

「どうしたの？こんなところで…」

真っさらな笑顔で話しかけられても、どんな顔をしていいかわからなかった。

「…特に意味はないわ」

「あ、そっか…」

居心地の悪さを偽るつもりはない。目を細めた哀が、蘭の傍を通り過ぎようとした時。

蘭は強い声音で哀を呼び止めた。

「ま、待って！」

哀は怪訝な顔をして振り向いた。

「ちょっと話さない？」

蘭の言葉に、哀は彼女を凝視した。

＊

――断りきれない自分の真意は？真意なんてもの、ないのかも。

喫茶店の空調は、明るい照明に反して肌寒いほどだった。

哀は、小学生を演じる気は微塵もない為、迷いもなく熱いブラック珈琲を頼んだ。ドリンクを運んできた店員でさえ首を傾げたが、目の前の蘭に驚いている様子はなかった。探るような目つきで蘭を見つめる。

蘭は、哀にとっては甘ったるく感じるココアを少しずつ口に含んでいた。

珈琲を一口飲んだところで、割と強気な目線を、蘭に向けた。

「――で、話って何かしら」

蘭の瞳には何か決心したような光が宿っていた。強気に出ていた哀は怯みそうになる。

「もうやめようよ」蘭は、哀から目を離さず、澄んだ瞳で哀を見た。

「哀…ううん、志保さん」

沈黙が流れた。

分かっていた。いつか蘭が悟る日が来るだろうと。

「……」

「私もさ、そこまで馬鹿じゃないよ」

悲しそうに蘭さんは笑った。

騙しきれる。一度たりともそんな考えを抱いたことはなかった。コナン以上に哀が、いつも不安と隣り合わせだった。隠しきれる訳ないと確信していたのは、むしろ哀だった。

「……知ってしまったの…」

そう、いつかは知る真実だった。しかし蘭が傷つく真実に変わりはなかった。
蘭を傷つけたくないという思いを、自分が蘭を傷つけているという自責の念を負いながら、哀は抱いていた。

「哀ちゃん…それじゃあ言ってる意味分かってるんでしょう？私は…深く詮索するつもり、これ以上ないよ……新一がきっとちゃんと話してくれる日がくるって、信じてるから」

「……そう…」

「……私が言いたいのは、ただひとつ」

哀は顔をあげた。

「……新一にこれ以上近づかないで」

私にも、こんな嫉妬の種があったんだ。蘭は思った。
正体を知らなければ、こんな不安に苛まれることも、嫉妬心に蝕まれることもなかったのに。

信じたくない事実ほど、妙なところで何かが剥がれて露見していって。

嘘だよね。何度も疑ったし、何度も馬鹿だと思った。

それは、隠し通すことも、目を塞いだままにすることもできないほどに。どんどん核心に迫っていった。

もう、可愛い弟と、その友達じゃいられないの。

だってふたりは――小学生じゃないもの。コナン君は――新一だもの。

「…私には貴女に逆らう権利などないわ。言いたいことはそれだけかしら」

「……哀ちゃんの気持ちは…」

静かに蘭は哀の目を探った。

心の痛みを感じながら。

誰にも告げるつもりはない――そう思ってた。――蘭だけには、そんな身勝手許されない。

「…ええ、好き」

恐らく永遠の封印は、蘭の前で解き放たれた。

偽りは微塵もない。

情けない気持ちはある。

それでも哀は蘭の目をしっかりと見据えた。

蘭が黙っているのを見た哀は、息を吐いて言った。

「安心して。この気持ちも棄てるつもり。いいえ、今棄てた」

蘭は何も言葉をかけることができなかった。

「工藤君はもうじき帰って来るわ。私の作った解毒剤の力で」

哀は、テーブルの上に５００円玉を置くと、「…ごめんなさいね」

と呟いて店から出て行った。

店を出た哀に吹きつけた空っ風に、髪が靡いた。

きれいな茶髪を耳にかけると、涙が流れる彼女の素顔が覗いた。

Ｆｉｌｅ２６（後書き）

一ヶ月ぶりでした！お久しぶりです。かなり試行錯誤した割には駄文で申し訳ないです。

長い連載なので、ごちゃごちゃした話になっておりますが、Ｆｉｌｅ６らへんを読み返して頂けると理解しやすいかなと。

蘭ちゃんと哀ちゃんは以前から交流があったということです。

本当に文才が無くすみません。

次回もよろしくお願いします。

File27

「よぉ～夫婦揃って登校か！？仲睦まじいね～」

船での事件の数日後、教室に入っての第一声がこれだった。脇に蘭を抱えた新一は、毎朝の洗礼ではある挨拶に、今日はひとつ違った心境だった。

「…バーロ、夫婦じゃ…」

「なーに照れてんだよ！もう皆知ってんだぞ。おまえらが正式にき合ってること！」

「え、マジ？」

しかし、すぐに園子が群集の中でニヤニヤしているのを見つけた新一は、事を悟った。

蘭は頬を赤らめながらも、幸せそうに微笑んだ。その顔を見た新一も、見守るような視線でフッと笑った。

新一は思った――こんなに蘭に余裕を持って接したことはなかった。

こんな、守りたいなんて感情……今までなかった。

噂というのは瞬く間に広がるもので、新一と蘭の交際の事実はその日のうちに知れ渡っていた。

移動教室の時、蘭が新一を誘い移動する、何気なかった光景も、今では恋人の関係が導くものだと誰もが思った。
新一の数多いファンや、蘭の崇拝者にとっては、“ついに”という寂しいニュースではあるが、全校皆が応援と納得をしていた。

授業も耳に入ってるのやら、いないのやら。
ううん、多分入ってない――――蘭は思う。
黒板は延長線上でしかなかった。その視線の先に、新一がいる、ただそれだけのことだった。
不安の種があったから、焦ってたんだ。
私、いてもたってもいられなくなっちゃったんだ。

四限目の終了を告げるチャイムが鳴った。机の脇にかけておいた小さい袋を取って、私は伏せる新一に向かった。

「新一っ！お昼一緒に食べよ」

「あ、ああ」と、眠たげに目を擦った新一を見て、いつもの新一だと思った。

屋上まで来ると、晴れ渡った空が心地好かった。まるで今の心境と通じてるみたいに。
こんな感じ。心の中も。

「ふー腹減った。ってか、わざわざ作って来てくれたのかよ」

「どうせ購買のパンになるの目に見えてるんだもの…」

「はは、たしかに…」

新一は渇いた笑いをした。

「今日は結構頑張ったんだから！」

私は思いっきり重箱の蓋を開けた。

新一が感嘆の声をあげる。朝は普段の一時間は早く起きた。出来栄えは上々。

「いただきまーす」

「へへ、どうぞ」

卵焼きと、ウインナーと、唐揚げと……新一の好物はちゃんと入れた。

「…うまい」

「ホント？よかった！」

……もう、浮かれ過ぎててこわい。新一は特に言葉を発さず、おかずを口に運んでた。

「そんなにお腹空いてたの？」

「ん、朝飯食ってなくてさ」

「もう…そんなんじゃ、今度は朝から押しかけちゃうからね」
冗談ぽく言ってみただけ。新一は一瞬箸を止めるて言った。
「……サンキュー」
「うん…」

たまに鳥の囀りが聞こえたり。新一が食べる姿をまじまじと見つめたり。新一は、「なんだよ?」なんて怪訝な顔をして見せたけど。
そんな何気ない時間も、幸せに感じたの。
心の持ちようが全然違う。ホッとしてる。新一はもう傍にいるような気がして。

プルルルル

その時、新一の携帯が鳴った。
「ワリ」新一は立ち上がって電話に出た。電話中、新一の顔が真剣にしまったように見えた。通話を終えると、新一は私を見た。
「悪い、蘭……事件みたいだ。急ぎだから、今から行ってくる。先

生に早退するって断っといてくれ」

一瞬の出来事。

「そっか…」

「蘭、ホントにごめんな」

「ううん…いってらっしゃい」

できるだけの笑顔を讃えた。

新一は、あからさまに反省の色を見せた。屋上の扉を開けた彼は、振り向きざま笑って言った。

「弁当美味かったぜ！」

…ありがとう。

寂しい微笑が浮かぶ。

それでも私は「いってらっしゃい」と新一を送ることしかできないんだ。

ううん……大丈夫

新一、いってらっしゃい。

Ｆｉｌｅ２７（後書き）

幸恵です。
駄文の塊でした。
船の出来事からはひとまとめにしました。

もっともっと三人の心理描写を丁寧にしたいのですが。私が至らず上手くいきません。泣

今日合宿から帰ってきたばかりですが、まだ体力が有り余って、小説投稿なんかしとります。

お気に入り登録が５０件超えて口が開いてます。読者の皆様には感謝のみです。有り難いです。

それでは、次回もよろしくお願いします。

File28（前書き）

小刻み更新中――

File28

平然な顔。

装ってると分かる人間は、恐らくこの中にはいない。

大分慣れてきた電車の通勤。見知らぬ人々が同じ乗り物の中に乗って、それぞれの目的地へと下りてゆく。流れゆく景色は、あっという間に移り変わって。そして私の、生きる――働く場へと導いていくのだ。

同じ研究所の仲間が、音楽プレイヤーを私に手渡してくれた。騒音対策として耳に嵌めている。適当に弄っているうちに、好みの音楽も出てきた。人がぞろぞろと主要な駅に降り立ってゆくと、車内の人も疎らになってきた。ぼんやりと目を閉じて揺られていた。

――新一にこれ以上近づかないで。

――やっと見つけた…

――新一が話してくれるって信じてるから……

――自分ばっか傷つこうとすんなよ。

――おい宮野…

――おかげで新一と恋人同士。

胸が痛み、気がついて目を開けば、目的の駅にもう着く頃だ。

＊

研究室の扉を開けると、同僚の美智子が白衣を羽織っている最中だった。こちらに気がつくと、挨拶をしてくれた。

「おはよう、宮野さん」

「おはようございます」

「そんなかたっくるしい挨拶なんかしなくていいよ」

笑うと可愛いえくぼができる篠田美智子は、研究仲間で同い年だった。志保は、そんな美智子が笑うと、いつも同級生だった吉田歩美を思い出すのだった。

志保は美智子の傍を通り過ぎると、荷物をロッカーにしまった。

「研究所には、もう慣れた？」美智子が聞く。

「ええ。なんだかんだでもう一ヶ月もいるしね」

「えっもうそんなに経ったの？早いね。でも私、宮野さんが来てくれて本当に嬉しい。ここの研究所は5、6人しかいないけど、みんな歳もバラバラだから。同い年の宮野さんがいるって結構な励みになってる」

「…ありがとう、私もよ」

「ねぇ、宮野さん！私のこと今度から美智子って呼んで」

「美智子…？」

「うん。私も差し支えなかったら、志保って呼ぶから」

いつぶりだろう。

“志保”だなんて。

博士くらいしか呼んでくれたこっなかったから。

「…ええ、じゃあよろしく」

「やった！志保、かぁ～なんか照れるね」

厭味のない笑顔を向けるこの子は、今時の19にしては珍しいほど純心な少女だ。

白衣を着た志保は、美智子の分のお茶もポットで入れはじめた。途端に美智子は思いついたように、志保に振り向いた。

「あっ！今研究中の薬があるじゃない？それにね、昨日新しいアプローチを思いついたの！」

が、志保は茶葉を急須にいれたまま、ぼんやりと立ち尽くしていた。
その瞳は辛そうに、眉が堪えるように寄せられていた。

「…志保？」

「……」

「志保！」

「…あ…なにかしら」

志保は隠すように苦笑いした。まだどこか心が浮いてるように、美智子には見えた。

「どうしたの？」

「…なんでもないわ…」

そんな顔してないでしょう、美智子は言葉を飲み込んだ。

「心配事があるんだったら、話してね？こんなんでもきっと役に立つから」

「…ありがと」志保は頷いた。

＊

家に帰ってきた志保は、まっすぐ地下室へ向かった。「志保君おかえ…」博士の言葉も、何一つ聞こえていないかのように、志保は地下室の階段を下りて行った。
博士は首を傾げた。志保の後ろ姿が消えていく。直感的に何かあったことを悟った。

パタンと扉を閉める音がすると、博士は珈琲メーカーを弄る手を止め、階段を下った。

扉に手をかけようとして、やめた———志保のすすり泣く声が聞こえた。

Ｆｉｌｅ２８（後書き）

志保ちゃん――…切ない。
次回もよろしくお願いします。

File29

事件だからという理由で、蘭との昼食を抜けてきた。
5分もあれば現場に着いた。現場は、帝丹近郊の住宅街の中の一軒家だった。新一は、主婦の野次馬をかぎ分けていった。立入禁止のテープの前で、警官が「どうぞ」と新一を通した。敷地に足を踏み入れるなり、高級住宅の装いを感じる。住宅街内でもなかなかの様相だ。庭にも婦人が好きそうなガーデニングが施されていた。

「目暮警部！」

玄関に続く廊下で、目暮がいつも通りの風貌で立っているのが見えた。

「おお、工藤君！来てくれたか！」

目暮が新一に気づいて向き直ると、新一は目暮の傍の見慣れた懐かしい人影に気がついた。あの背広の色は……

「おっちゃん！？」

思わず呼び慣れた愛称をあげた。おっちゃんなる人物は、くいっと目暮の後ろから顔を出した。

「た、探偵坊主？なんでお前がいんだよ！この事件には、この名探偵毛利小五郎様がるんだから、お前は引っ込んでろ！」

「……ってそんなこと言っても、俺は目暮警部に呼ばれたんだから仕方ねぇだろ…？」

「警部殿！この私めがいながら、何故こんな坊主に！？」

「まあ仕方ないだろう……捜査に進展の見込みがないのだからなぁ」

「って言ってもですねぇ…？こんな若造何の役に立ちませんよ」

……ムカ。

新一は思わず眉を寄せた。黙って言わせておけば。

「仕方ねぇだろ。俺だって目暮警部に呼ばれたんだから。事件に関わらせてもらうぜ」

＊

結構手こづる事件だった。

見慣れた二丁目の住宅街に入ると、どこかの家の庭から虫の鳴き声が聞こえた。そろそろ夏か…。

腹が鳴る。時計も腹時計も7時だと教えてくれてた。昼メシろくに食わないで出て来ちまったから。

寄るべき所は分かってる。

こうなったら、今時夕食をしてる博士ん家に上がり込むしかないだろ……

……けど、
心が突っ返ることがひとつ。

宮野志保だ。

客船パーティー一件後、一切会っていない。宮野に言われた一言が、あの家から俺を遠ざけていた。理由はそれだけって訳じゃないけど。……俺、鬱陶しい奴でしかなかったな。しつこいおっせかいを焼く、鬱陶しい奴。あの時、宮野はどこかはち切れそうな表情だった。躊躇う気持ちが押し止めていたが、ジレンマを振り切ってドアを勢いよく開けた。

「…ただいま！」

そして静止。
目に入ったは、博士だけだったからだ。

「おお、新一」

「…あれ、宮野は？」

「……」問い掛けに、博士は黙って俺を見た。煎れかけの珈琲を置き去りに、博士はやって来た。追い出すように近づいてくる博士に追いやられ、家の外に閉め出された。

「オイ、どうしたんだよ」

「しぃー！」
博士は一本指を立てた。神妙な面持ちだった。
「…志保君に何かあったみたいなんじゃ」
「…なにかって？」
「船のパーティーから帰ってきた時からおかしかったが……。数日前は、部屋で泣いてたみたいじゃしのぉ…きっと何かあったんじゃ」

＊

馬鹿みたいに動揺している。
なんだ、このざわめき。

腹が減ってたなんて、もう頭から抜けていた。カーテンを開けて窓から隣を見つめてみた。それも無意味だと悟ると、ソファーに身を投げた。

何に泣いていたんだ――。

昔からそう、弱みを見せない寂しいヤツだった。
だからこそ、不安になるんだ。
いっそ、曝け出してくれたなら……この不安も……。

宮野――俺、お前のことになると、自分をコントロールできなくなるんだ。

ただ、心配だった。

頭の片隅に宮野をくっつけながら、俺は瞳を閉じた。

Ｆｉｌｅ２９（後書き）

なんだかサラサラ書き流してしまいました上に、始めの事件要素は何の意味があったのやら。
小股で更新しております。

次回もよろしくお願いします。

File30

トントン、と地下室の扉を叩く音がした。静かに、博士の配慮がありありと見えた。
長椅子に伏せっていた私は、身じろぎもしなかった。
「……志保君？…起きているかね？」
返事も無かった。
「…今、新一がやって来た。」
顔だけ上げた。暗く淀んだ胸の内に、一点の光が射した。
「…追い返したが……志保君のこと、気にかけている様子じゃったぞ。」
部屋の外で博士は、問い掛けに期待も持たずに、静寂を守りながら去って行った。
それを悟った志保は、何とも言えず息を吐いた。知らず知らずのうちに、苦しめる。それは無意識だ。だからこそ、小憎らしい。
工藤君は蘭さんとくっついた。
彼女の前では、威厳を守った。私は想いを棄てる、と言い切ったのだから。哀しみの言葉を吐き出すことも出来なかった。

それは麻薬みたいなもの。
後から気がつくのだ。体が蝕まれていくことに。
平気だ、と言い聞かせてみても、心の隅で彼が叫んでる。

これが、最後。
もう好きでも何でもない。
もう終りにしよう。
旅の途中、彼への愛しさを投げ捨てる。
ただ、ひたすら自分の道を歩こう。今の私にはそれしかできない。

＊

「新一？」
「……。」
「ねえ、新一ってば！」
「…わっ！」

何度呼び掛けたことだろう。新一は全く上の空で、私が無理矢理立ち塞がるようなアクションを起こさなかったら、きっと永遠にこっちを向いてくれなかった。案の定新一はドンと私にぶつかった。

「蘭、どうしたんだよ！」

「それはこっちの台詞よ！さっきから呼んでるのに、全然気づいてくれないんだもん。」

「…ああ、ワリ。」

様子から察しても全く気づいていなかったことが伺える。

「昨日、事件解決したんでしょ？お父さんに聞いたよ。」

「…あっああ。そういえば、毛利探偵もいたな。」

「お父さん悔しがってた。最近事件でも調子上がらないから。」

「はは…。」

「…新一…何だか寝不足みたいだけど…。」

「…ああ…。」

また素っ気なくなる返事。

一緒にいるのに、隣を歩いているのに、別の事を考えてる新一。不服な私は、思いっきり新一の頬を抓った。

「い、いひゃい！」

「バカ〜！！」

こんなんで気が満たされるわけじゃないけど。
何を求めてるかなんて、簡単なこと。新一の愛、他の何物でもない。

「なっなんだよ！蘭！」

新一、何を考えてた？

「……新一のバカ！」

本当に言いたいことは聞けなかった。

認めたくない真実は隠して。私が認めたら、何もかも終わるだろう。
辛うじて繋ぎ止めてる一本の糸も切れて、もう終る。

「蘭？」

新一は、その悩みを、私に話す気にはならないんだ？
新一にとって、顔を覗き込む今だけが、私を考えてる時間。

「新一…何でも話してね？」

「？……ああ。」

しばらく私が黙ると、新一はまた彼女に頭を悩ます。
私は新一を想い、新一は彼女を想う、この無言の時間。
何があったかは、知らない。それでも彼女は新一を支配する。私の方が長くいるのに。
宮野さん……ズルイよ。

「……ばか。」

もう一度の呟きは、新一に届かなかった。

Ｆｉｌｅ３０（後書き）

さらさらと書いた短い話でした。段々三人の揺れを明らかにしていきたいです。新一だけ鈍いです。なんだかイライラしてます。笑

次回もよろしくお願いします。

File31

プルルルル
機械音が続いていた。

思い立ったようにボタンを押したんだ。
この一週間、俺の頭の片隅には必ず彼女がいた。泣いてる宮野の姿は想像できなかったが、どんなことをしてても、アイツがいた。
一日の終わりに家の戸を叩いても、追い返す博士が出て来るだけで。彼女の様子を拝むことはできなかった。
こんなに宮野のことを想ったのは、初めてだ。

「出てくれ……。」

宮野の携帯に電話をかけるのは久々だった。コール音が5回ほど流れる。

「頼むから……。」

携帯を持つ手に力が入る。

『…はい、もしもし。』

「みっ宮野!?」

『……ええ。』

嬉々とした俺と裏腹に、携帯を挟んだ宮野は掠れ声だった。でも、その掠れ声すら聞いたのは久しぶりで、それ自体俺は喜んでた。しばらく無言が続いたが、これ以上の沈黙となると、彼女は一方的に切ってしまうような気がして、慌てて言葉を続ける。

「俺と…遊園地にでも行かねぇか！？」

突発的だった。

何言ってんだ、俺は。

一番聞きたいことは、聞けなかった。彼女を傷つけそうな気がした。

『……。』

「…やっぱ、ダメだよな…。」

『工藤君……あなた、しょっちゅう家に来てたでしょ。』

「わかってたのか？」

『…当たり前よ…。あなたが私の心配してるなんて、おかしい。あなたには私の泣いてる理由なんて永遠に分かりっこないのに。分からない時点で慰めようなんて気持ち、捨てた方がいいわ。』

「…どういう意味だ…？」

『…それと、遊園地の話。』

急な話も、宮野はしっかりと覚えていてくれたらしい。

『あなたは、もう蘭さんの彼氏なんでしょう。蘭さんを悲しませな

いで。疑われるようなことしないで。蘭さんの幸せを考えて。他の女とデートなんて、馬鹿げてるわよ。』

電話越し、声音の変化を押さえ込むのは大変だった。志保は胸の高揚を押し隠した。自分の事を気にかけている新一の想いが伝わったからこそ。

「……そっか。そうだよな。」

空気が抜けたように、出てくるのは空笑い。

「ごめんな、変なこと言ってよ。……宮野？」

志保は口を真一文字に結んでいた。唇が微かに震えている。

『……すべては宿命。生を受けた時から決まってるわ……それならこんな気持ち…いらなかった。こんな思い、したくなかった。』

「志保……？」

『ごめんなさい、今のは忘れて。感傷的になっただけ。あと家には来なくていいから。それじゃあ……またね。蘭さんのこと、幸せにしてあげなさいよ。』

聞こえてくるのは、ツーツーと、寂しい機械音。

“蘭さんのこと、幸せにしてあげなさいよ”

最後の言葉が胸に焼き付くようだった。

まるで別れの言葉のように。

新一は携帯を閉じると、ベッドに身体をほうり投げた。

＊

「一緒に帰ろう？」

誘いなど要らない仲なはずなのに、そうしなければならない自分が、やけに腹立たしかった。

蘭は目を見開いた。

久しぶりだった。新一が蘭へと甘い笑みを向けたのだ。

こんなの見たの……懐かしい。そして幸せの波が押し寄せてくるのが分かった。

季節は目まぐるしく移ろって。秋も盛り。紅葉が色づいて、町中が華やいでいる。秋の空気は乾燥しきって、肌がぴりぴりと痛むこともある。

私達は相変わらず黙ったまま。

恋人達の倦怠期？

数ヶ月の私たちにも存在するのだろうか。知り合ってからは、もう十数年経つけど。

横目で新一をちらりと見た時、新一と目が合った。一瞬たじろぐ。

「手、繋がねぇか？」

「え、ええ！？…う、うん。」

雪でも降るんじゃないかな。蘭は真剣に空を仰いだ。
まさか新一がそんな……。恋人だから当たり前なのかもしれない。
それでも、そんな気配全く見せなかったから。

「…蘭は、恋人らしいこととかしたいよな。」

「な、何よ急に。そりゃあ…したくないって言ったら……嘘になるけど…。」

改めてとなると照れ臭い。
“蘭は”って何よ。

「嫌だったらいいよ。別に私となんかしなくても。」

強がってみた。新一は少し顔を赤くした。

「い、嫌じゃねぇよ。」

そんな彼が可愛いと思った。言ってみようかな。もう、この際！

「じゃあ、新一。それなら……キスして。」

「なっ！？はっ、ハァ？」新一は驚きに口をポカンと開けた。

「恋人なら……やるでしょ。」

私は多分真っ赤っか。いきなりこんなレベルアップはないかな。
だって抱きしめられた事すらないのに。

「……そうだよな。」

呟くと、新一は私の両肩に両手を置いた。ドクン、と大きく心臓が跳ねる。嬉しさとドキドキが混合してる感じ。
ぎゅっと目を閉じて、待ち構えていた。その時、携帯の着信音がした。

Ｆｉｌｅ３１（後書き）

新一と蘭が急接近？

次回もよろしくお願いします。

File32

「…はい、もしもし。」

いい雰囲気のところを割り込むように、電話が鳴って。不機嫌になる私を前に、何だかバツが悪そうに新一は電話に出た。

「…え？はい。わかりました。すぐ向かいます。」

ピッと電話を切る新一を、いじけた子供のような目で睨む。

「……事件でしょ。」

「当たり。隣町みたいだから、今から電車乗って行ってくる。」

何万回も聞いたような気すらするこの言葉。寂しい気持ちはある。けど、新一の好奇心に輝く顔を見てしまうと、つい隙が出来て、ただ見送るしかなかった。

でも今日は……もっと新一といたい。どうしても。

「よし！私も行く！」

「えっ、オメーもか？」

「…なに？何か文句でもあるのかしら？しん・いち・君？」

「…あ、イヤ。無いです。」
明らかに力で押し倒した……。
新一は目を丸くして、素直に頷いた。今までは私に気が引けて現場に連れて行ってくれないけれど。今日こそは！

ふたりの乗った電車は時間が時間なだけに人は疎らだった。がっぽりと開いた座席に腰をかける。
「隣町だからすぐ着くさ。」
新一は腕を組むと俯いた。眠いらしく、いつ瞼がくっついてしまうか分からない。蘭はそんな新一を見て、ふっと笑みを浮かべると、身を少し新一に寄せた。
起きているのか、確認のため話しかける。
「二人で電車乗るのなんて久しぶりだね。」
「…そうだな。」
起きていたみたい。
「ねえ、事件ってどんな内容だったの？」
「蘭が聞きたがるなんて珍しいな。……大学での殺しだよ。」
新一は私に気を遣ったらしく、それ以上のことは言わなかった。
「でも悲しいよね……。殺人事件とか…嫌だって思っても、前より

そういうことに慣れてる自分がいるの。」

「……蘭…。」

「…ごめん。私が行くって言ったくせに。気にしないで。」

隣町なんてすぐだった。電車の速度が落ちていく。駅名は聞いたことはあるけど、止まったことはない所だった。

＊

駅を出て少し歩くと、人だかりが出来ている建物があり、そこが現場だということは容易にわかった。新一が走ると、蘭は慌てて後を追った。野次馬を掻き分けて新一は進んでいく。蘭は人に埋もれながらも、新一の服の裾を掴み、迷子にはならずに済んだ。大学の前に立つ警官に、新一は声をかけた。

「すみません。現場はどこですか。」

「ああ、工藤君か。それなら大学を入ったホールすぐだよ。警部がお待ちかねだよ。」

「ありがとうございます！蘭行くぞっ！」

「う、うん！」

ホールに入ると、刑事や鑑識がその場を占領していた。顔が利いている新一と蘭に、誰も不思議そうな顔をする者はいなかった。制服の二人が現場に混じることに多少な違和感があるだけで。

「工藤君！来てくれたか。」恰幅の良い物分かりの良い目暮警部が歩いてきた。

「はい。事件の概要を教えてください。」

「うむ。…今日は蘭君も一緒かね。」

目暮は、事件を嫌がる蘭を不思議そうに見つめた。蘭は新一の横に出てくるのと、小さく頭を下げた。

「こんにちは。邪魔にならないようにしますから…。」

目暮は気を取り直すと、オホンと咳ばらいをした。

「被害者は山邑君江さん。医学部に在籍している大学2年だ。午後3時半頃、ホールのこの場で急に苦しみだし倒れた。受付の女性が駆け寄った時に、既に息はなかったそうだ。」

遺体はとうに片付けられていた。白テープの印がなければ、現実か現か分からなくなるほど。

立入禁止となっているが、大学内の者は今だ待機を余儀なくされているので、少しでも見物しようという輩が、囲うように円を作っていた。

「毒物ですね？」

「そうだ。被害者からは時間で効く毒物が見つかったよ。」
「……まずは被害者の死ぬまでの行動を洗いましょうか。」

＊

「ちょっ…どこ行くのよ？」
「ウチの大学で殺人があったって！今警察が来てるみたいよ。一階のホールだから行ってみようよ。」
志保の腕をがっちりと掴んだ美智子は階段を猛スピードで降りて行った。
実験を終え、休憩を持て余していた二人。トイレから帰ってきた美智子が、いきなり志保の腕を掴んだのだ。
「こんな大学で殺人事件なんて……。」
平和で静かな大学なのに。志保は怪訝に眉を寄せた。その声を聞いているのかいないのか、美智子は振り返りもせずに言った。
「わたし殺人事件なんて見たことないよ！わぁ……って喜んじゃダメよね。」
そんなこんなで二人は野次馬の前まで来た。大学内の者が皆集まっ

ている。
美智子が志保の手を握ったまま、野次馬を掻き分けていった。人込みに押し潰されそうになり、志保は顔をしかめた。
「あっ…志保！見て見て！」
「なに？」
「高校生探偵の工藤新一君がいるよ！」
志保の顔が青ざめていった。
ある程度の距離はある。
それでも美智子の声と同時に新一の姿が目に入ってしまった。

ザワザワと耳障りな音。人々のざわつく声。何となくその中から“志保”なんて名前が飛んだ気がした。
「…まさかな。」
新一は自嘲に近い笑みを浮かべると、空しい望みに顔をあげた。人込みの中に珍しいあの髪色が見えた。
「まさか……。」
まるで引力に引き付けられるように、気づいたら走り出していた。
その人込みを掻き分けていた。

Ｆｉｌｅ３２（後書き）

最後らへんが駆け足でしたね。
次回もよろしくお願いします。

File33

新一の体はすぐに反応した。

事件のこと、私のこと、も何もかも……今の新一の頭からは空っぽなんだ。ただ、力強く呼んだ“志保”という名の宮野さんのことしか。

こういうのを、動物的六感というのだろうか。

いやだ…。

胸で強く思った。

そう、腕が無意識のうちに、新一を取り留めていた。

一瞬何が起こっているのか理解しきれてない新一のカオが振り返った。

何かに魅せられたまま。

ぐっと押し潰されそうな気持ちを奮い立たせた。

喉仏が熱くなって、涙が吹き出そうになった。

「あ…。」

新一は我に返った。

「蘭――。」

名前を呼ばれるのだって、今は虚しい。

「どうしたの？今は事件だよね。」

涙が目に溜まっていた――と思う。私の顔見て、新一が苦しそうに顔をゆがめたから。

「……オレ…。」

よくあるテレビドラマで、恋人が他の女の子と楽しげに話しているのを見て苦しくなるとか、恋人の本心を知って失恋しちゃう女の子とか。私は、その娘達の気持ち、痛いほどわかるよ。

「戻ろうよ。」

つなぎ止めておけるのかな。
こんな出来損ないの笑顔でも。

「……そうだな…。」

顔を見据えれば、“大丈夫”なんて顔してないのはすぐわかる。

それでも新一は黙ってついてきた。
……早くこの時が過ぎればいいのに。
つなぎ止めてる一本の紐が、解けてく。ゆっくり……それはいつ解けてしまうのだろう。
離れてゆく速度がどんどん加速していくように。

もう、遅いかもしれない、

＊

我を忘れてた

と言えば言い訳になりそうだが、それが一番適当だった。あの揺れる茶髪が遠ざかって行くほどに、追いかけなければ、って衝動が働いた。

何だか、体が頭が自分自身が、すべてが素直に動いていたような気がする。

蘭は黙って俺の腕を掴んだ。

…蘭の手が震えているのを感じた。

「あ…。」

小さく声を漏らす。

「蘭――。」

蘭の蒼白な顔を見て、何してたか一瞬にして読めた。

そして、嫌というほど、自分の気持ちに気づいてしまった。

「どうしたの？今は事件だよね。」

目を合わせられずにいると、蘭の瞳に涙が溜まっていることに気づく。

最低だな――――。

必死に流さまいとする蘭。けど、かける言葉が見つからない。

「……オレ…。」

「戻ろうよ。」

無理に笑って、その笑顔が余計苦しくなった。

どうしても目を合わせることができない。

「……そうだな…。」

イエスの返事をすれば、何も見ないようにと、先に横たわる事件へと歩き出した。

隣を歩く蘭が、小走りについてきた。

＊

何があったんだろう。

かの有名な工藤新一君が、志保の名前を呼んで、志保は俯いて走り出したから。
私は驚いて空っぽな頭のまま、志保の後を追った。
彼女の黒いフレアスカートが揺れてる。私は必死に追いつこうと走った。特に賞をもらったことのなかった私は、元陸上部で良かったなあ、なんて、この時初めて思ったかも。
志保は体力がないから、案外すぐに追いついた。

「待ってよっ…！」

細くて、か弱いような、そんな手首を私はするりと掴んだ。

「っ……。」

「はぁっ……。」

私たちはお互い息を整えて。向こうを向いたままの志保は肩を上下させていた。
呼吸が静まってきた頃口を開いた。「……どうしたの。」その声は、同じく静かなキャンパスに、響いた。

志保は最後まで顔を合わせたくなかったみたいだけど、私はいつまでも志保の腕を掴んでいたから、志保は観念したようにこっちをゆっくりと見た。
……あ…。
張り裂けそうな顔だった。

事情を聞く。
今はそんなことできそうもないね。

私は志保を抱き寄せた。
友達？…ううん、親友として、こうせずにはいられなかった。
その瞬間、魔法のように、彼女の胸中がすうっと胸に入り込んできた。
……恋の痛み。
「……志保…。」
志保はあの探偵君が、
……好きなんだ。
静かに涙が、彼女の頬を伝っていた。
それは次第にとめどなく。

Ｆｉｌｅ３３（後書き）

一ヶ月も放置しました。読者の皆様ごめんなさい。９月は忙しい月でした。
実際この話、進め方に戸惑い、３度書き直しをしました。苦笑

うーん。
繋ぎ方微妙だったかな。
月と太陽には頭を痛めてます。

次回もよろしくお願いします。

File34

「悲しい事件だったね…。」

夕暮れに消えていくパトカーを見送りながら、蘭がぽつりと呟いた。
オレンジとコバルト色が広がっていた空に抜けていった。
事件後の、あのよそよそしい雰囲気が辺りを包んでいる。
彼女は、体裁は繕っているものの、声はどこか力無かった。
“悲しい事件”解決した事件は、悲しい恋愛のすれ違いによるものだった。伝えなければならないことを、後回しにして、気づかないふりをして、溝を生んで。そして互いを裏切った。
蘭は目を細めた。ズキズキと痛む胸は、もう数時間前から。無意識のうちに自分とを重ね合わせてしまう、そんな自分を、もう一人の自分が笑う。

「だったな…。」
徐に同意する新一。
「……ほんと…、バカだよ。犯人も、俺も……。」

「……え…なにか言った?」

蘭が振り向く。

「蘭、オレおまえに言わなきゃいけねぇことがあるんだ。」

「…なに…?」

勇気を奮い立たせるためには、笑うしかない。漏れるのは不可解な笑みと、掠れる声だった。

「今まで俺、蘭に嘘ついてた。いや、蘭だけじゃなく、自分にも。」

「……うん。」

「幼なじみとして、大切な蘭にぜってーついちゃいけない嘘ついてた。」

「……。」

ずっと考えてたことだから。思いのままに、言葉が出てきた。
すっかり冷たい秋の空気が辺りを包んでいた。
蘭は黙ったままだったし、俯いて表情も読み取れなかった。けど、言葉は出かかってる。傷つけると知っていても。

「俺さ……、」

「聞きたくないよ。」

「蘭？」

「聞きたくないってば！」

蘭は耳を塞いだ。蘭が声を張り上げるなんてことは滅多にないため、新一は目を丸くした。

「わかってるよ！！全部。新一の言いたいことなんて、わかってる

……わかってるわよ……。新一が気づくずっと前から……。」

「おい、蘭…、」

「今は新一と話したくない。」

一言そう残し、蘭は走り去って行った。
追い掛けていいのか。
新一は立ち尽くしていた。

Ｆｉｌｅ３４（後書き）

一気すぎですね……急展開。
が、しかし。３４話。そろそろ進めないとやばいです。
駆け足感否めませんが、お許しください。
次回もよろしくお願いします。

File35

嗚咽まじりの息をつきながら、蘭は足を緩めた。随分と暗くなった静かな通りに、自分の足音だけが響いた。それが虚しさと孤独を掻き立てた。

「…はぁっ……。」

蘭は立ち止まった。電灯の明かりがちらちらと点滅している。

――いるわけない。

一人ぼっちの通り。

――追いかけてくるはずない。

バカだよね。

ついてこないで。なんて言葉を投げつけておきながら、期待してるなんて――バカだ。

これで、本当に終わりなのかな。

まっすぐと、ただ一筋に。新一の目には、偽りも狂いもなかった。新一は自覚してないんだから。その目に、ずっと私だけを映してればいい。浅はかな考えだった。

堪えきれないとでも言うように、正確に途切れることも、戸惑うこともなく、声は届いた。

もう……迷ってないの？

繋ぎ止めてた糸は、向こうの指からするすると解けた。

＊

足の裏が地面に張り付いたように、突っ立ったままだった。
追いかけたい気持ちはあった。けど、俺が追いかけたところで、どうなるわけでもないんだ。

「……そうか…。」

今まで俺、ずっと…ずっとアイツのこと……。

こんな愛しい気持ちに今まで気づかなかったなんて、
あんなに傍にいたのに。
離れて、なくして、初めて気づいた。

自分の未熟さと、愚かさ。

わかってるんだ、今でも――。
蘭を傷つけちまうことくらい。
けど、もう無理だ。

ずっと抱いてた違和感がやっと消えた。

本心隠して蘭と付き合うなんて、もうあの頃みたいに嘘はつきたく

ないんだ。

オレは———宮野が好きだ。

Ｆｉｌｅ３５（後書き）

極短です。
焦らしてあっさりと好きだと自覚させちゃいました……。
次回もよろしくお願いします。

File36

「あっ。これ志保に似合うんじゃないっ。」

と言って美智子は、白いシフォンのワンピースを志保に重ねた。途端に志保は顔を引き攣らせる。

「こんな服着れるわけ……。」

「いいから、いーから！はい、購入〜！」

美智子は志保の背中をレジへと押す。そして今まで着たこともない洋服を買う。さっきからこんなことばかりやっている。泣きつづけた顔には笑みが零れて——志保は笑っていた。

キャンパスでは、一心不乱にただ涙を流していた。ずっと、独りで泣くことしかしらなかったから。「泣いていいんだよ。」だから、初めて言われた一言に、心が解れた。

お友達と買い物をすることは楽しい、と思う。けど、ずっと出来なかったから。今は泣いてたことも呪縛のような想いも忘れてしまっている。それほど楽しい。

「……ねえ、」

「ん？」

「…ありがとう。」

素直に言えた。

テラスに面した喫茶店、美味しいカプチーノが有名らしい。

彼女の前の温まったカプチーノの湯気で表情はぼやけたけれど、頬を染めて笑っているように見えた。

「…ここのパフェおいしー。」

美智子はチョコパフェのクリームを口に運んでにんまりと笑った。

私はと言えば、例の美味しいカプチーノを一口口に運んだ。美智子を見て思わず微笑んだ。

美智子の顔に陰はなかった。

「…何も聞かないのね。」

「何もって？」

「泣いてたこととか——色々ね。私らしくなかったでしょう。」

今さら、私らしくなかったでしょう、なんて。

「そうかな……私は安心したよ。」

安心？

「今まで志保には何かあるなって思ってたの、押し隠したものが。

――吐き出してくれて嬉しかったよ。ほら、親友だし。」

ほら、親友だし。

もし私が、簡単にそんな気恥ずかしいことを言えてしまう彼女なら。
想いの丈をぶつけててしまえたのだろうか。

「…それに、志保。言いたくなかったら言わなくていい。志保が話したい時に私は聞きたい……ね？」

「……そう…。」

私は眉を寄せて俯いてしまった。

＊

問題が解決するまでは――
アイツに会っちゃいけねぇ。

独りの家路を歩き、明かりのない自宅の門を開けた。

明日学校は休みだ。蘭には会えない。会いに行かない限り。

今にもアイツに気持ちを伝えたい。それもダメだ。
問題が解決するまでは――

頭じゃわかってるけど、博士ん家を見て立ち止まってしまうのは何故だろう。

皮肉なものだ。

あれほど訳もなく長くいれた時間が今は恋しい。ずっと隣にいた。
それが日常で、必然だったから。
あの頃は知らなかった。こんな気持ちになるってことが。

家に入るのを躊躇ってしばらく突っ立っていた。
電信柱の明かりに季節外れの虫が一匹飛び回っていた。

…と、向こうから二つ足音と人の声が聞こえた。
「……。」
黙って見つめていた。
ふたつの影は次第に大きくなっていき、俺は誰だか見えた。視力には自信があった。

「…宮野……。」

片方の女性は宮野だった。
胸の動悸を感じる。
気恥ずかしくなって、顔が熱くなった。いや、それ以上に胸が熱かった。

彼女は沢山の袋を抱えていた。
そして隣には見知らぬ顔の女性がいた。

……互いに笑っていた。

「……くど…う君……。」

宮野の目が俺を捉えた。
宮野の顔から、さっと笑顔が消えた。

ほんの１０メートルしかない。

俺が理性を抑えていられたのは、多分初めて見た女性のおかげだ。
きっと二人だったら、何してたかわかんねぇ。

きっと今すぐにでも駆け寄って、“好きだ”って後先考えずに叫んでたはずだ。

「…よぉ。」

何て言ったらいいのかわからずに、照れ臭さも伴って、でてきたのがこんなんだった。

「……。」

宮野は完全無視…いや、少し俯いて、俺の声は聞こえてなかったように、自宅に入って行った。

「宮野っ。」

取り残されたのは、俺とその女性。

「…工藤新一さんですよね？」

女性は突然近づいてきた。

「？はい。」

「私、篠田美智子っていいます。いきなりで申し訳ないんですけど……、」

その篠田美智子は妙に落ち着いた笑みを浮かべて言った。

Ｆｉｌｅ３６（後書き）

迷走中です。
蘭ちゃんが忘れられてます。
次回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1832q/

月と太陽

2011年11月7日05時51分発行